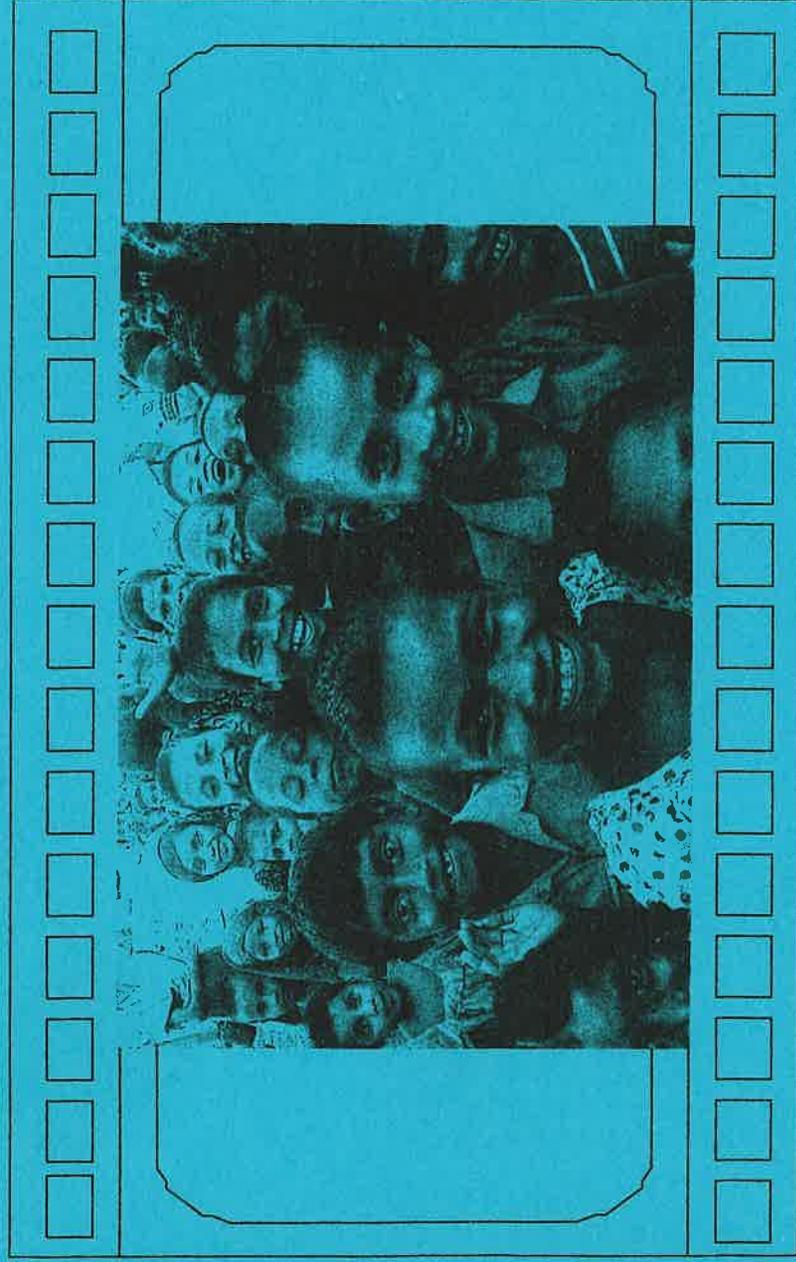


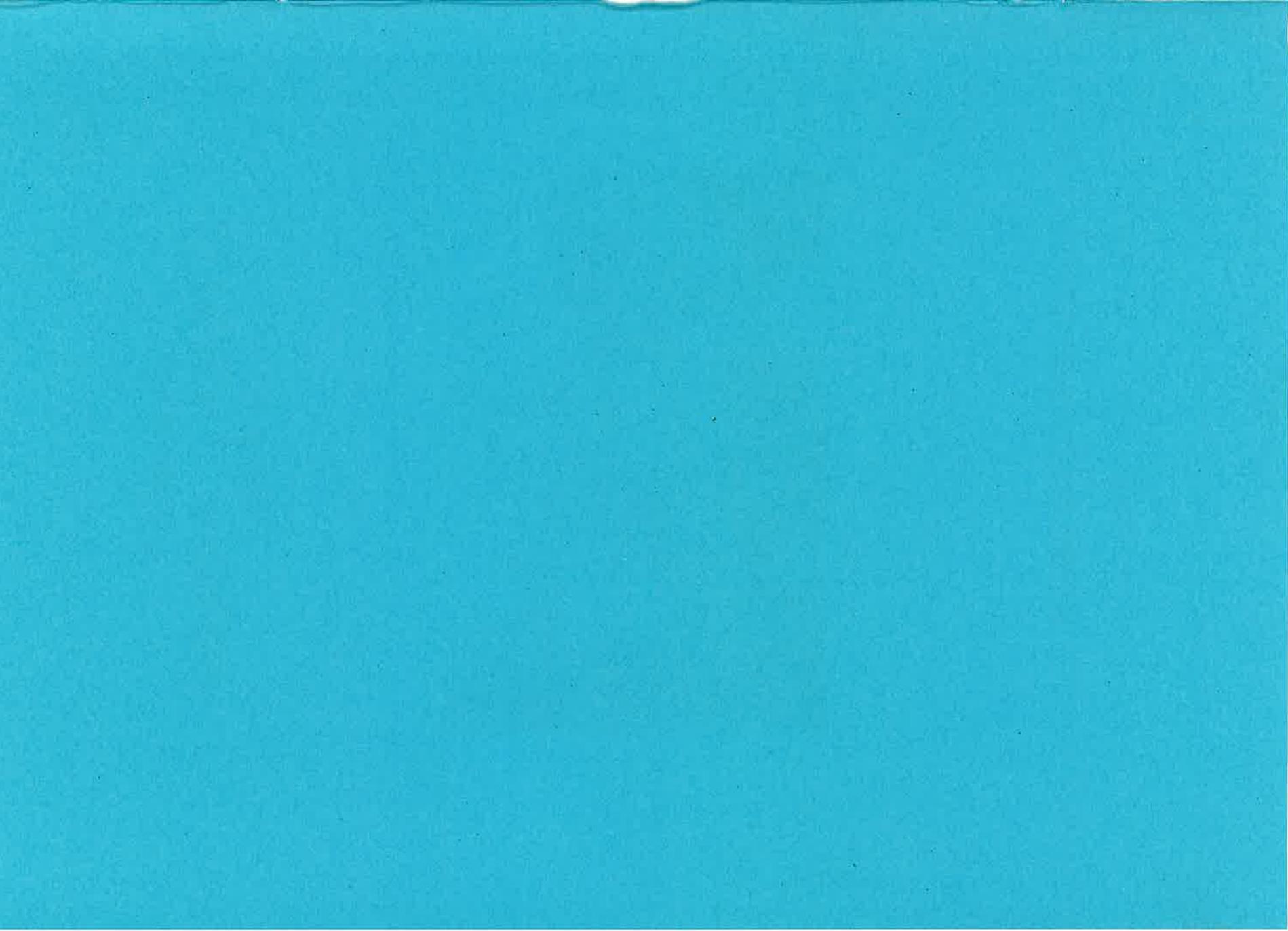
ACEF STUDY TOUR

31st



バン格拉デシユ寺子屋訪問

2006 / 8 / 4 (Fri) ~ 2006 / 8 / 18 (Fri)



第31回

バンガラテッシュタスティーツァー報告書

—目次—

●スケジュール●

●メンバー紹介●

●スタッフ紹介●

●各地域の報告●

- ・プーバイル
- ・ネトロコナ
- ・ジャマルプール
- ・カティラ

●ベンガル語の基礎知識●

●ベンガル・ソング●

●生活様式●

●ランキング●

●みんなの感想文●

●参加者名簿●

アミ ダウデル モト ガンガイ

バンングラデシユの賛美歌

採譜・訳詞 塚本潤一

2006/8/26



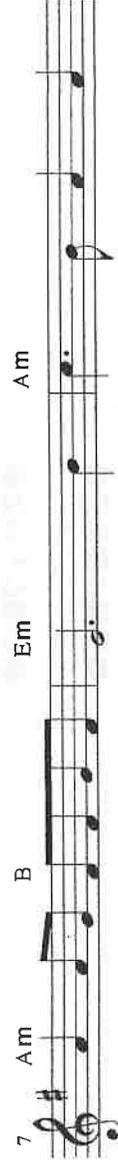
Em B Em Am B
イッシヨレルアッタアエ ジョコンチャラエ アミ ダウデルモトガン

ダビデのようになでうたいま



4 Em B Em
ガーイ

しょう イッシヨレルアッタアエ ジョコンチャラエ アミ
しょう ダビデのようになでうたいま



7 Am B Em Am
ダウデルモトガン ガーイ

みんなでうたいましょう ガーイ
みんなでうたいましょう



10 Em Am Em
ガーイ

しょう、うたいましょう、うたいましょう、うたいま
しょう、うたいましょう、うたいま



13 Am B Em
ダウデルモトガン ガーイ

みんなでうたいま しょう

バンングラデシユ版の「アミ ダウデル モト ガンガイ」と、ブラジル版の「さあ、ダビデのように」（こどもさんびか13番に収録）が、あまりにも似ていたことで、最初はブラジルから輸入されてバンングラデシユ風に変更されて伝わったのか、と塚本は思いました。しかし、キリスト教音楽講習会で有名な作曲家（編曲家）の先生に塚本仮説を披露すると、「いや、『アミ ダウデル モト ガンガイ』にしても、『さあ、ダビデのように』にしても、バンングラデシユやブラジル古来の伝統的メロディや構成ではなく、明らかにドイツのコラール（ドイツ語で作られた古い賛美歌）の影響を受けています。それがそれぞれの伝わり方をしたのではないのでしょうか。」とのことでした。ということは、ドイツで歌われていた古い賛美歌が東回りでバンングラデシユに、西回りでブラジルに伝わり、今東京のACEFで出会って、世界一周したことになりました。なんて、夢に満ちた歴史であることでしょう。しかしこれはあくまでも仮説なので、この仮説をさらに裏証すべく塚本は引き続きバンングラデシユをお訪ねさせていただいて、歌って踊って学ばなければならぬという、論理的必然的結論が導き出されたのでした。

2006年スタディーツアー日程表 8月4日～8月18日

- 4日 (金) AM9:10 成田国際空港集合
 定刻より3時間遅れでピーマンバンキングラヂオデジシユ航空78便にて出発
 同日夜ダッカ空港到着、プーパイル事務所到着
- 5日 (土) AM 2つのグループに分かれて2箇所の学校訪問
 PM ニューマーケットでサロワカなどの買い物
 BDP スタッフによるオリエンテーション
- 6日 (日) AM 日曜礼拝参加、学校訪問
 PM 近くの商店街で買い物
- 7日 (月) AM カティライ、ネトロコナ、ジャマルプールの学校訪問
 A チーム (ネトロコナ) B チーム (ジャマルプール) C チーム (カティライ)
- 8日 (火) 学校訪問 学校訪問
 釣り 大合唱 スタッフ宅訪問
- 9日 (水) 学校訪問 ボクシガンジーの学校訪問 学校訪問
 田坂先生の講義 ガロ族宅訪問 自由時間
- 10日 (木) 学校訪問 学校訪問
 学校訪問 パシエット宅訪問 学校訪問
 学校訪問 メンディー、サリー体験
- 11日 (金) ポート遊び ポート遊び メンディー、サリー体験
 眼科へ ポート遊び メンディー、サリー体験
 学校訪問 学校訪問 学校訪問
- 12日 (土) 学校訪問 学校訪問 先生方との交流会
 メンディー、サリー体験 ブラック工場訪問 日曜礼拝参加
- 13日 (日) 学校訪問 学校訪問 村人との交流
 市場で買い物 町との交流
- 14日 (月) 各村からプーパイルへ移動
 全員でシェアリング
- 15日 (火) 職業訓練校、サイフル宅訪問
 学校訪問、近くの商店街で買い物
- 16日 (水) 動物園訪問
 カルチャースhow
- 17日 (木) スタッフを交えて最後のディスカッション
 閉会礼拝
- 18日 (金) 帰国
 ダッカ空港に向けて出発
- クロージングミーティング

Aチーム 自己紹介



田坂先生(たしやかさん)
 我らがAチームのリーダー♪♪
 とってもインテリでみんなに様々な
 コトを教えて下さいました！
 しかし、ちよつと自慢が玉にキズ…
 寒いダジャレを連発し、みんなの
 ムードメーカー的存在でした☆



木菜ちゃん (左から)

実は年齢不詳な彼女…。
 アノ坂先生にも申せるのは彼女だけです。
 そんな落ち着いた木菜ちゃんだけれども、庭で
 飼っていたパッチャをこよなく愛するのです。
 追っかけている姿かわいかったなあ～☆

芽衣ちゃん

しっかり者の高校生。なんとスタディーツアー
 の旅費を全て自分で稼いだとのコト…我が道を
 突き進む彼女ですが、実は夢中☆なアナルー
 ルさんに常に熱い視線を送る健気な女の子♪
 バングラでは大学生に負けず劣らず積極的で
 た！！

丹羽さん(丹羽先生)

私たちの頼れるお母さん。
 お業よりも良く効く、素敵なお笑顔と
 やわらかいボイスにより私たちはいつも元気をもらってました。
 でもちよつとお茶目なところも…☆

亜土ちゃん (中央3人 左から)
 まさしくペンガリアン・ガール！！
 ちっちゃいながらも、豊富な才能を
 持った彼女☆

実は歌も英語もおよ一ず◎
 ニキルさん、ゆきさん、現地の医学生と
 恋多岐娘です♪

馬場ちゃん

学生の中では一番お姉さん☆
 ニキルさんが大好きで亜土ちゃんと一緒
 にいつも彼の隣をキープしてました。
 好奇心旺盛なピチピチの大学4年生！
 いざという時に頼りになるみんなの姉御
 的存在でもありました～♪♪

増田さん(マス) (右から)

子供が大～好きな小学校の先生。
 楽器が得意で、寺小屋訪問の時にはその腕前を
 発揮していました☆何に対しても積極的でガンガン
 自分から進み出ます！これには学生も願負け…
 非常にエネルギッシュなお方です◎

絢香ちゃん

学生の中では最年少の高校1年生。
 マイペースでちよつと天然はいつてる?!
 素直でおもしろく、みんなを楽しませてくれました。
 食いしん坊万歳!!! バングラで様々な
 コトを吸収し、更なる成長を遂げたことで
 しよう～☆☆

ジャマルプールバ

バンガル語は
私に任せて!!



☆和子さん☆
みんなのお母さん♪

色々話を聞いてくれて、本当にお世話になりました♪
へモントさんに毎日マンツーマンでベンガル語教室を開いてもらって
仲良しこよしでした♪

ニャパニース・ボス!!



☆中川さん☆
ジャパニーズ・ボス!! 英語ペラペラのすごいお方☆
元国連職員だったそうです♪さすがっ!!
なにせ顔の半分ひげですから〜笑



TSUTAYA
佐良さん

☆トマト☆ (ゆいぽー)

トマトさんの周りにはいつも子供がいーっぱい♪
心の優しい、顔がいつもニコニコの乙女ちゃん☆
全然見えないけど、実はBチームの中で一番年上です♪

☆山旬さん☆

自他共に認めるオクっぷりに「へえ」と言われたこと数知れず。
みんなをぐいぐい引っ張ってくれた頼れるガ'リーダー(?) ☆
少年のようで、大人。あと…汗かきすぎ! 笑



アニョン・オハク'木木不好き



汰(バク'不盛り!!)

☆チエロキー☆ (ちーちゃん)

食べる、歌う、食べる、歌う……。大食いのくせに細っ!!!
誰にも負けない元気なパワーを持ってました♪
ベンガル語理解度No.1 ☆さすがが英文科、言語得意そうでした☆



虫には
毛子さんに

☆まなみ☆

ジャマルプールのマドンナ♪老若男女からラブコールが!
(蚊にも人一倍愛されたネ♪)
はだしてバレエを踊ってくれた時はみんな拍手喝采でした!



00さ〜ん♡



☆りさちゃん☆

持ち前の明るさと優しさでいつも元気を振りまいてくれましたッ♡
りさちゃんの良いやりに感動することしばしば!
周りに気配りできるって、素敵なことだね。



早稲田の
萌え系女子

☆もえみちゃん☆

とにかくカワイイ最年少! もえ〜♪
ディコさんからは《僕の子うさぎちゃん》なんて言われていました♪
が、シエアリングではしっかりした意見を積極的に出し、
みんなを驚かせました!



Cチーム（カティラ）



上段左から：松本拓・高橋麻由子・千葉なつみ・塚本潤一

下段左から：上原あゆみ・井上儼子・ステファン(ダッカスタッフ)・石澤萌依子

※写真のポーズは、大木こだま・ひびきの『タッチキチー』

- 松本拓…カティラのアイドル！子どもたちに大人気。折り紙や日本語を教え、さすがが教師！という一面もありました。
- 高橋麻由子…子どもたちが大好き！という気持ちは誰にも負けません。けじめがあり繊細な心もあり表情豊かです。
- 千葉なつみ…明るくてとてもポジティブ！そしてメンバーへの気遣いをしてくれるしつかり者。
- 塚本潤一…歌って踊ることが大好き！言動一つひとつがみんなを笑わせてくれます。おかげでCチームは和やか！
- 上原あゆみ…劇のうさぎ役がともお似合い。天然さに溢れ、Cチームでは唯一高校生という愛らしい存在です。
- 井上儼子…おもしろギャグを連発！まさに笑いのツボ。それに負けないほどの流暢なベンガル語！我らの頼れる母的存在です。
- ステファン…Cチーム専属のダッカスタッフ。BDPスタッフ紹介を参照。
- 石澤萌依子…蚊にさせられないように完全防備を頑張っていた。虫除けスプレーと長袖の上着ははなせません。

フーバイルスタッフ

総勢23名の生活を支えてくださったスタッフの方々の紹介です。

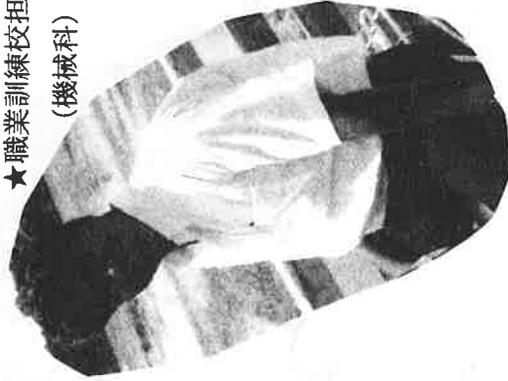
エリックさん

★コーディネーター★
(事務所長)



ショミルさん

★職業訓練校担当★
(機械科)



ラハジさん

★BDP スクール担当★



サイフルさん

★職業訓練校担当★
(コンピュータ学科)



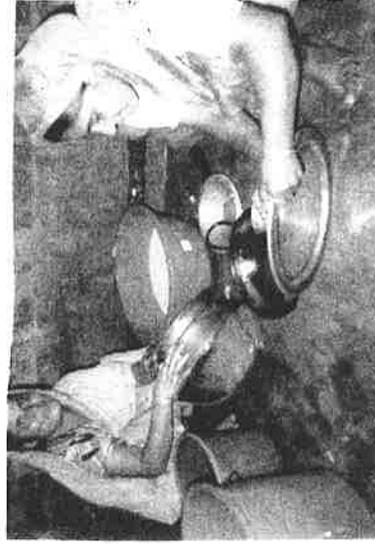
オモルさん

★BDP スクール担当★



プロカシユさん

★職業訓練校担当★
(電気科)



★食事を作ってくくださった方々★



★警備員さん★

スタッフ紹介

ネットロコナスタッフ ダッカスタッフ



マムーンさん

日本語が上手で達筆なお方。

私たちのベンガルネームを書いてくれました！

コミュニケーションングを一生懸命覚えて
いる姿が可愛かった☆ゴミをポイ捨てしちゃう
癖があるのでご注意ください！！

寺子屋訪問の時に私たちが出し物をする

お手伝いをしてくださいました。

よく私たちにベンガルソングを

教えてくれた Good Singer でした☆

気品漂う、ザ・ジェントルマンなファールークさん。
あついハートの持ち主で、数々の名言を私たちに
残してくれました。

真面目な表情の中には・・・意味深な笑みが
実はお茶目で恋ばな好きのファールークさんに
メンバ―皆がからかわれていました☆

あのアツい眼差しと

素敵なおひげは一生忘れませぬ！！！



ハビブさん

BDP ネットロコナの責任者。一見ちよつと恐そうに

見えますが・・・それは見かけだけのコト☆子供が
大好きな Good Teacher デス！！いつも私たち
のことを気遣ってくれる心優しいパパ。

“みなさんごはんです！！”と食事の度に呼び
にきてくれたそのお声が懐かしい・・・

バイクに乗りハンドルを握るそのお姿は
思わず惚れ惚れしちやいます。

スタッフ1の恥ずかしがり屋。

無言だけれどニコニコしながら

チャイを注いでくれていました。

毎日気持ちよく過ごせよう、

お世話していただきました。

そんな姿に魅了されたため〇ちゃん♪

最後は涙のお別れだったね☆

A チームのアイドル☆

よく食べよく遊びよく寝る少年のような一児のパパです。

あまーい声でよく鼻歌をくちさんだり・・・

かと思えば、ルンギをふんどしのように

巻き付けて川へ飛び込んだり・・・

素敵なおパフォーマンスに皆がメロメロでした☆

また明手席に乗らせてくださいなね♪



ニキルさん

A チームのアイドル☆

よく食べよく遊びよく寝る少年のような一児のパパです。

あまーい声でよく鼻歌をくちさんだり・・・

かと思えば、ルンギをふんどしのように

巻き付けて川へ飛び込んだり・・・

素敵なおパフォーマンスに皆がメロメロでした☆

また明手席に乗らせてくださいなね♪



ファールークさん



アナールさん

BDPスタッフ



I'm boss!!

☆アルバートさん☆

ベンガリー・ボス!! 部下には常に命令口調☆ 私達とは喋りたがり屋さんになります♪
そしてアルバートさんの前で他のスタッフと喋ると相当な やきもち屋さんになります☆

Iのcar.

☆ヘモントさん☆

素晴らしい歌声の持ち主♪

さらに、教壇に立つと山ジュンが嫉妬するくらい(笑)立派な先生へ! でもカズ子さんに日本語を教わっている時は大人しい生徒さんでした◎

☆ボムさん☆

強面とガッツリした体つきに似合わないセクシーな寝姿とオチャメな性格の持ち主。
そして何より、イケ☆ドラバ-!
彼の車に乗った瞬間、そこはマリカートの世界。



Taneto

☆モリスさん☆

まんまるのお腹・トマトマクは日々、私たちの癒しでした笑
太鼓と団扇のプロ(多分)!
めっちゃにこやかにこやか〜♥なジャマルの長。



Hey girl♡

☆デ'イコさん☆

ギター・携帯・女が3種の神器(?)。
バンクラの行休・イでありスタッフ1プレイボーイの彼はとってもいいひと。
なんだかんだ1番お世話になりました☆



Iのfamily♪

☆マースドさん☆

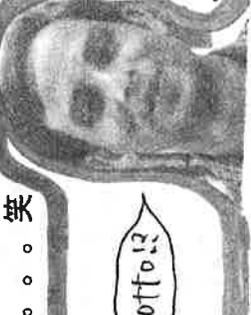
ボクシガンジーのオーガナイザー☆
将来有望な娘と息子の二児のパパ
幸せな家庭を築いていらっしゃるしやいました☆羨ましいい〜
私たちの入る隙間、全くありません。。。笑



☆Smile☆

☆バシエットさん☆

♪バシエット一、バシエット一、バシエット一♪
笑顔が引きつっているプレイボーイ☆奥様は20歳!!!
かなりのやり手です♪笑



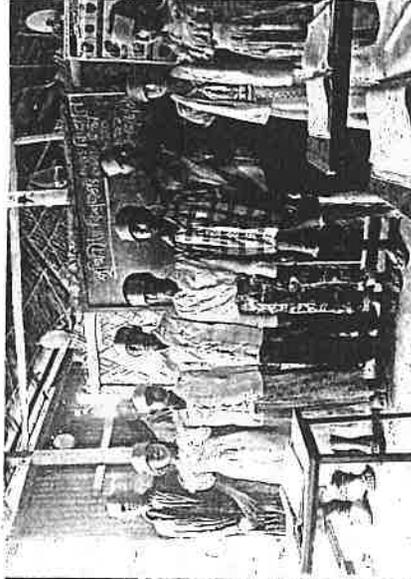
chotto!?

☆モタレフさん

最初は無口な人だと思っていたら、実はおちゃめな人だと判明!
いくら「チヨット(少し)」と叫んでもご飯を大盛りしてくれる
太っ腹なお方でした♪

プーバイルで過ごした1週間

◆スラムの寺小屋訪問◆



私たちが寺小屋を訪問する際、初めて訪れたのがダッカ郊外のスラムにある寺小屋でした。最初はみんな少し緊張気味でしたが、教室に入るとすぐに子供たちの勉強に対する熱意や集中力、先生の教えることへの情熱に思わず圧倒されました。この日はちやうど幼稚園のクラス、小学1年生と4年生のクラスが授業を行っているところでした。子供たちの大きな目をキラキラさせて勉強している姿からはメンバ－1人1人が様々なことを感じ取ったことだと思えます。決して恵まれた環境とは言えない中で、子供たちが本当に素敵な笑顔を浮かべていたことがとても印象的でした。

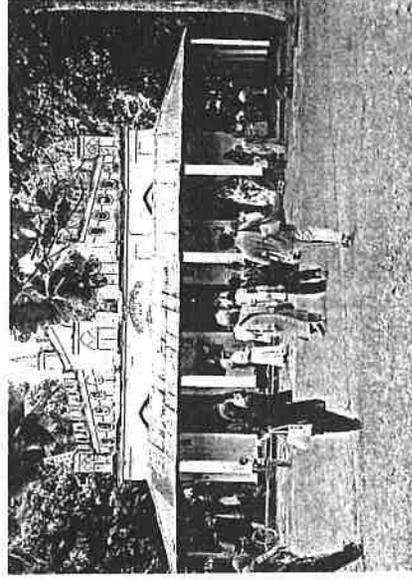
8 / 4 ~ 8 / 7
8 / 1 4 ~ 8 / 1 8

◆カトリック教会◆

バングラデッシュに到着して3日目に私たちは地元のカトリック教会を訪れました。この教会は普段日本で目にするものとはまた一味違ったかわいらしい作りのもので、教会の皆さんが私たちが私たちが温かく迎えてくれました。

その後、一緒に礼拝に参加させてもらったのですが、その礼拝のやり方もバングラデッシュ独自のものです。中でも特に、太鼓などを用いた独特のリズムの賛美歌や少女たちの踊りなどは本当に素晴らしいものでした。こちらからは牧師でいらっしやる塚本先生が聖書を読み、私たちも賛美歌を歌うなど共に楽しくまた貴重な時間を過ごすことができたと思います。たとえ国や人種、言葉は異なっても“祈る心”はひとつなのだ…。そう実感したひと時でした。

またこちらの教会は厳格なカトリックの宗派であったので、出ることはできないと考えていた聖餐式も牧師さんやシスターたちのご好意で参加を認めてくれたり（結局は参加しなかったのですが…）、礼拝終了後においしいお茶やおかしをごちそうしてくるなど、教会の方々の親切心には感謝の気持ち一杯です。



8月16日

Culture Show



いよいよスタディーツア一も終わりに近づいてきました。
この日はプールの近くの小学校に通う小学校の子供達や
BDPスタッフ、私たちに近いバンクラディッシュでの時間を借しみながら、
楽しんで過ごしました♪

こんなにたくさんの方が集まってくれました♪

Aチーム

田坂先生の「アミ ダウテル モト ガンガイ」
熱唱から始まり、「大きなカブ」のパーフサート
を披露♪「うんとこしょ、どっこいしょ」が皆さん
気持ちこもってました☆ 子供達に大気♪
さらに、「これはなんだけいぞ」
「ビューティフル コミュニティ」の歌&踊りなど
盛りだくさんでした！さすが！



おどってくれた子供達
お化粧して衣装着て
とっても CUTE ♡
色っぽい♡も、負けず



Bチーム

「ロボウヌマース」(にじ色の魚)の劇を
やりました。セリフに感情をこめるのが
大変だったけど、皆頑張って特訓しました！
ヘモントさんのバンクラッシュでの説明もバッチリ☆
テイクさんの素敵なギターをバックに、
「神の国と神の義を」を合唱しました〜♪

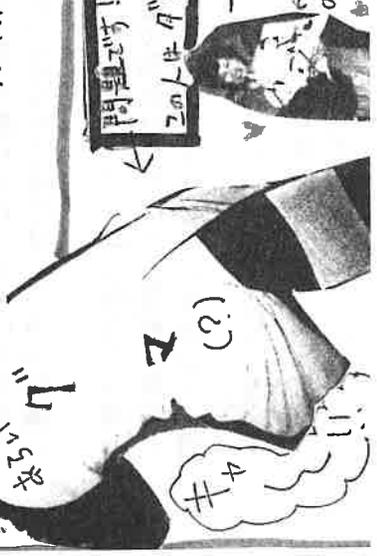
最後の日、みんな
が通クサクサな汗ば
き、
夏の匂い...



とっても楽しいそうなお話のみんな
(+山崎さん)

Cチーム

Cチームの劇は元気いっぱい！！
小道具(?)も多彩で、
見ているお客さんも巻き込んで、
大盛り上がりでした♪
更に、力行メンバーで作詞作曲をしたという
歌も披露してくれました♪



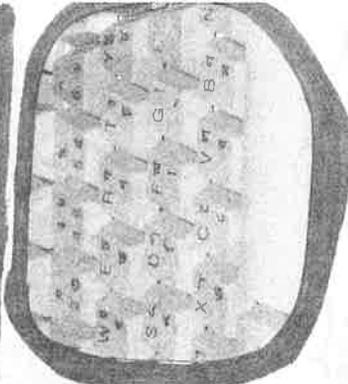
問題です!!
この人は誰でしょう!!
アツク
○オマケだよ...

最後は歌って踊ってどんちゃん騒ぎ♪みんな楽しそう(*_**)

職業訓練校

パソコン

サイフルさんがパソコンの責任者。男女半々くらいのクラスでパソコンのタイピング、修理などを学んでいます。キーボードには日本のパソコンでひらがなが書かれているところにベンガル語が書かれています。しかしインターネットなどは繋がっておらず、繋げるのには相当のお金が必要だそうです。



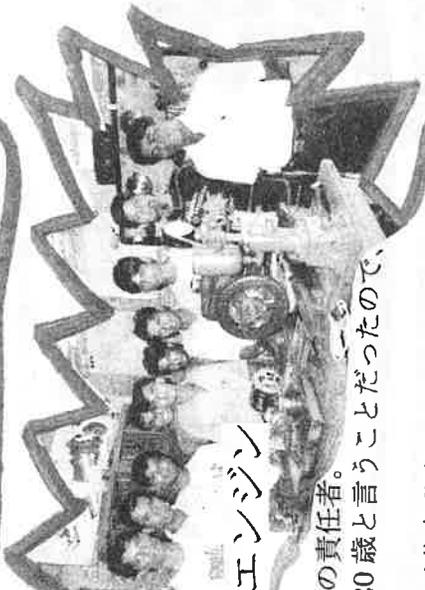
電気

プロカーシユさんが電気の責任者。私たちが訪問した時は、扇風機のモーターのコイルを巻く勉強をしていて、実際にコイルを巻くところを見せてくれました。他にも家庭用電気配線の構造の勉強も頑張っていました。生徒は全員男性の私たちと同じくらい歳で、仕事と勉強を両立している姿がとても印象的でした。



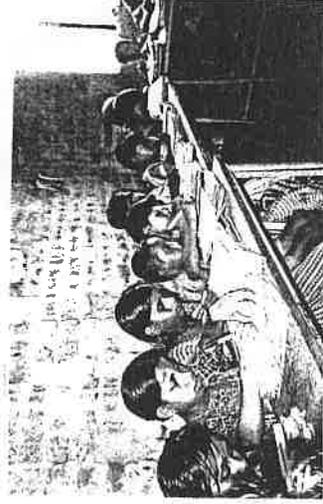
ダイゼルエンジン

シヨミルさんがダイゼルエンジンの責任者。全員男性で年齢を聞いたら17歳~20歳と言うことだったので、私たちと同じくらいの歳です。見本となる各部品の説明表は日本の三菱自動車の設計図を使っていました。ここでは主に車の修理方法を勉強して、修理工場への就職を目指しています。実際に私たちの前でダイゼルエンジンを動かしてくれました。



ネトロコナには6つの学校があります。
とても人なつこく、やっぱ写真は大好き!!!

ハシダオ~~~~☆☆



授業内容..(算数・英語・宗教・社会・理科等)

この字型の座席形態が特徴☆

そのため先生は一人ひとりの生徒に対し、

丁寧なチェックして回ることができるのです!!!すご〜い!!

GWや手拍子で楽しく、だけれども真剣な姿は
本当にステキでした。

緊急告知!!!

8/9 17:00~

●田坂講座☆開講●



メンバーからのリクエストにより

DDT・農業に関する授業をしていただきました。
常識を覆すようなお話に、私達・スタッフ一同
偉大な先生に釘付けでした!!!

金曜日は学校がお休みの日。

ということでスタッフの方々と一緒にBoat Tripへ。

そこで働く若い少年がオイル臭い中

一生懸命モーターを動かしている姿が印象的でした。

風に揺られ揺られ〜♪♪

途中でヒンドゥー教徒女性の沐浴姿を発見!!

休憩では🌀チャイと🌀クッキーでお茶会♡

川岸では多くのさとうきび畑に遭遇☆

日本のものよりも断然背が高くて驚き!!

村の長老より、さとうきびをプレゼントされました。

船内へ吹き込む風が気持ちよく...

夢の世界へ飛んだ方もちらほら〜★

とっても優雅なヒトキでした!!



TASAKI MARU

Bチーム

スタディーツアーで行くのは4年ぶり！
広大な土地と、どこまでも続く青い空が印象に残った地区でした♪

ジャマルプール



ジャマルプール地区

山ジュンが持ってきたこいのぼり☆
なんと全長7m！皆のサインを書いて、ジャマルプールに寄付してきました♪

♪ジャマルプールでのすてきな生活

今年のジャマルプールは暑かった！！

30度を超える暑さはもちろん、湿度が80%以上なのだそう！

でも、今年は現地の人もぐったりするほどの猛暑だったみたいです
みんな、毎日汗だくでした。

でも、だからこそお水がとても美味しく感じられたり、

水浴びが最高に気持ちよかったです、自然の恵みのありがたみを

実感することができました♪

暑い中に飲む、あったかい甘いチャーはクセになりました☆★



★バ>ガリチャ(チャー)の作り方♡

(2-3人分)

- ① ナバに 200ccの水を入れ、バ>ガリチャの茶葉を小さじ2杯入れて煮出します。
- ② 津端した5、牛乳 200cc をお皿裏に砂糖 20gをとかしていただきます。
- ③ 砂糖は全部溶けたら完成♪ 香りは十分に3分ほど入るとより本格的になりますよ！

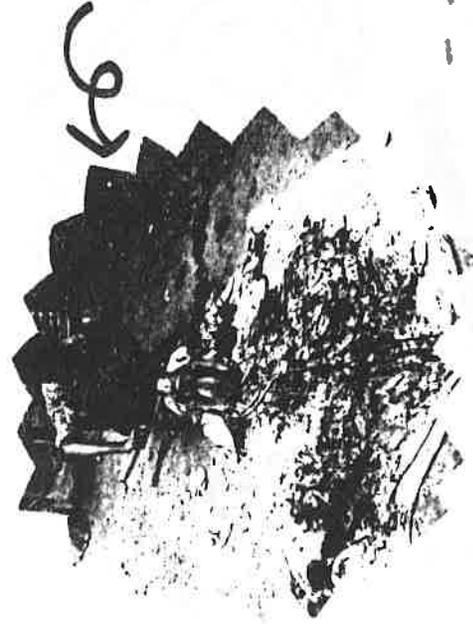
一日何杯も飲ませませ!! ☆

歌うの大好き♪踊るの大好き♪

空き時間はみんな庭の木陰でお昼寝したり歌ったり♪

BDFPスタッフはヒマさえあれば歌を歌ってくれます。

アルバートさん、中川さん、デイクさんは素敵なギター演奏をしてくれましたし、ヘモントさんの歌声はとってもダンディ♪ オサムさんのダンスは情熱的でした(*^^)ホッ



1日目の学校訪問へ行く途中で見かけた風景！
 10歳くらいの男の子が、
 慣れた手つきで牛の解体をしていました！
 向こうの子供は当たり前のように動き手として
 生きているのだと改めて実感しました。
 そして、日本の子供には決してできないだろうと
 シェアリングで話し合いました。
 (大人もなかなかできないだろうけど)

♪みんなの笑顔がたからもの



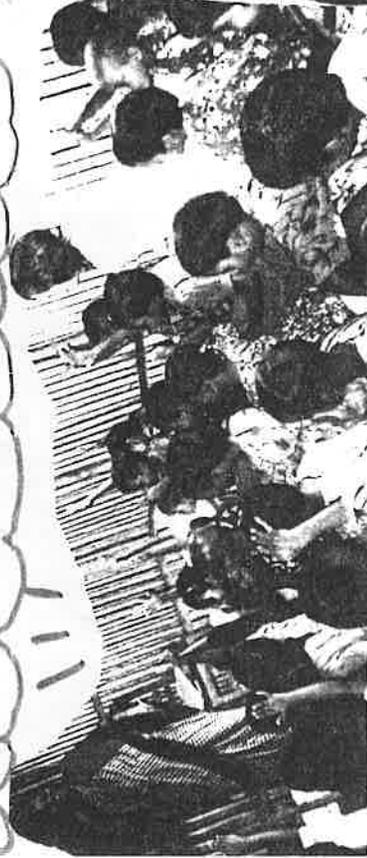
「にじいろの魚」…タコの登場！！(スミを吐いています)



毎日暑かったけれど、学校訪問は本当に楽しかったです。
 子供達とベンガル語で、「大きな栗の木の下で」や「幸せなら手をたたこう」を歌ったり、一緒に授業を受けたり、みんなで頑張って作ったペーパーサートの劇「にじいろの魚(ロンドウヌ・マース)」をやったり♪
 そんな交流を通じて得られるまぶしいくらいの子供達の笑顔は、本当にたからものでした☆
 私たちにとつてジャマルプールでの生活は、いつも笑い声が絶えないくらい、楽しいひとときでした。
 それと同時に、そこで学んだこと・感じたことをこれからもずっと心の中に生かしつづけていきたいと思っています。

WE ♥ JAMALPUR !! トンバット

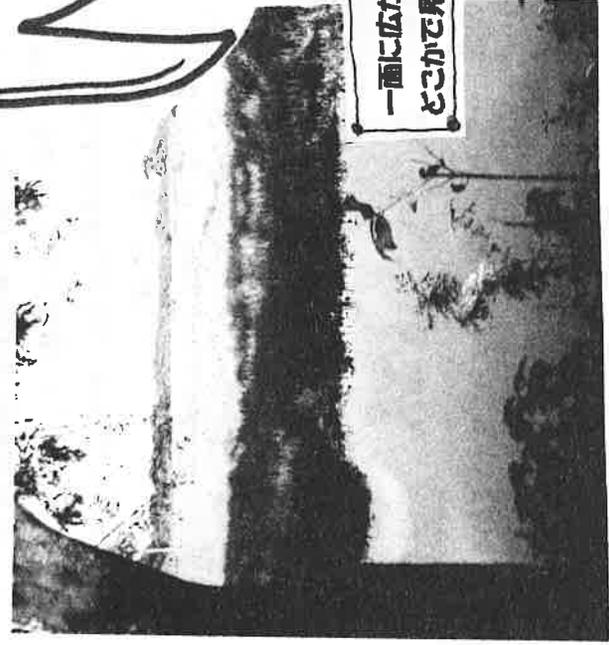
先生「この問題分る人～！」みんな「は——い！！！」



みんな仲良し♪(ハーレム状態)

なんたって

カテイヤ地区*



一面に広がるジュート畑は、
どこかで見たような懐かしい景色。

8時間掛けて行く距離は十分あります!!

2006. 8/7 ~ 8/13



ゾニハ行っても
知らないから
おしゃべり花の
プレゼントをもらいます。いばな花を少しお花見!!
全然おしゃべりから日本に持ち帰りたかったんですよ

カテイヤまでの交通手段は... ☑

ワンボックスカー? (車) → 高速バス → フォレリア → 乗り合いバス (乗り合いバイク!!)

カテイヤに行くまでの道中で、私達は色々な体験をしました。物乞いや、交通ルールはほとんど存在しないバンガラで、まるで映画「スピード」を生で体験しているかの様な運転さばきに一岡ドキッ! とすることも。

カテイヤ県「バンガ(カンジス河)」これに入れればあなにもカテイヤ
とにかくカテイヤは極カが面白い!! ★★



カテイヤ名物(?!)池泳ぎ

湿度も高いし、子供と遊んだりもして汗ビショビショ!
そんな時は・・・シャワーじゃなくて、池に入りましょう
女性陣はサロワカ、男性陣は自由に、池に入りました。
日本人が池にブカブカ浮かぶ姿はちよっと異様かも・・・(笑)
でもでも、一緒に入ろうと飛び込んでくる子供もしばしば。皆で入れれば気持ちいい!

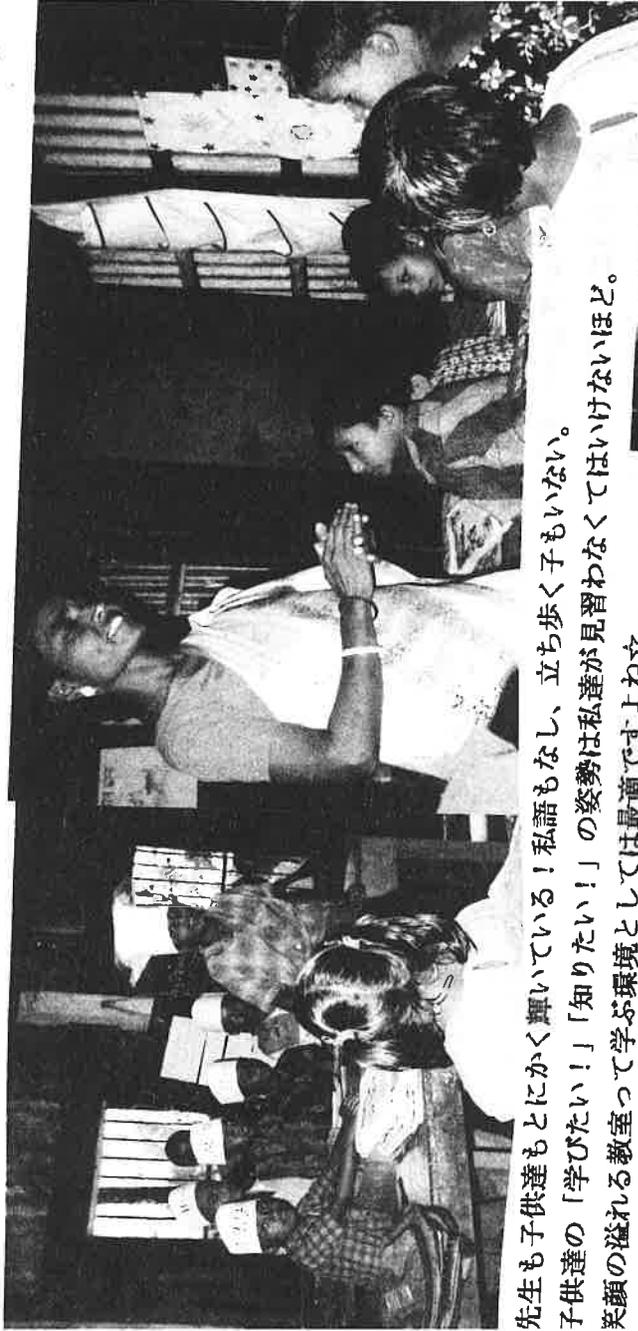
カテイヤには私達が忘れかけていた“自然と共存する社会”が存在する。...

★ 学校訪問 ★

電気がない？

電気がない？

1611や、そんなの聞えない！！



先生も子供達もとにかく輝いている！私語もなし、立ち歩く子もいない。子供達の「学びたい！」「知りたい！」の姿勢は私達が見習わなくてはいけないほど。笑顔の溢れる教室って学ぶ環境としては最良ですよ☆



升

● ヒンドゥー寺院訪問 ●

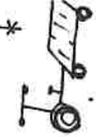
見知らぬ我々を盛大にもてなして下さったヒンドゥー寺院の皆さん。軽快な音楽に合わせて皆でダンスすれば心は一つに♪宗教の共存は可能なのです！(踊り続けて倒れそうになった私達を始終気遣ってくれていた女性の方も)(涙)本当に本当にありがとうございます！

★ カティラの子供達 ★



最後のお別れでは私達も号泣！しかし、子供達の目からも大粒の涙が・・・
 “泣かないで？私達はずっとあなた達を思っているよ”と子供達を抱きしめる。
 こんなにも私達を思ってくれた人があるなんて、何て幸せなのだろう。
 最後の最後まで感動は続いたのです。

カティラの子供達
 とにかくです！
 日曜やいんです！
 トロワ、こんにちは！
 一かめいんです。

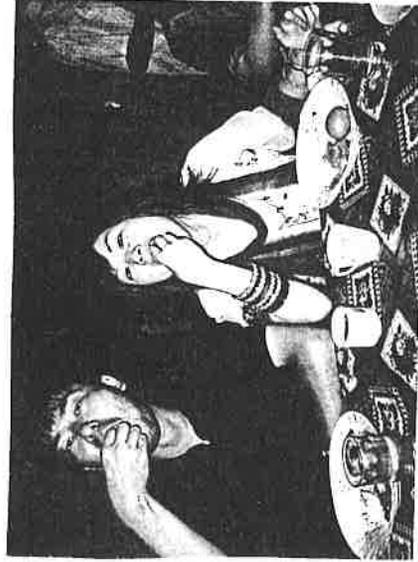


＊

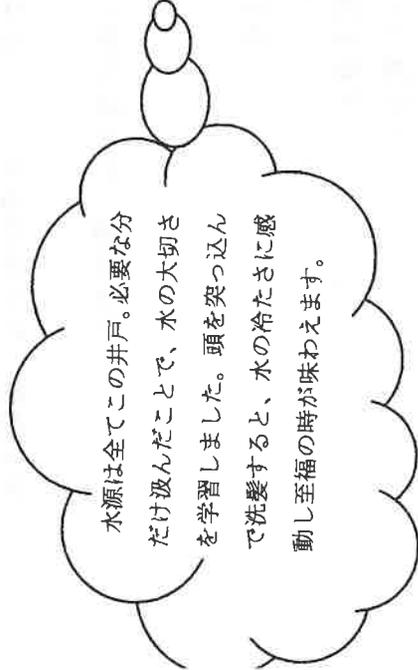
Daily Life

In Bangladesh

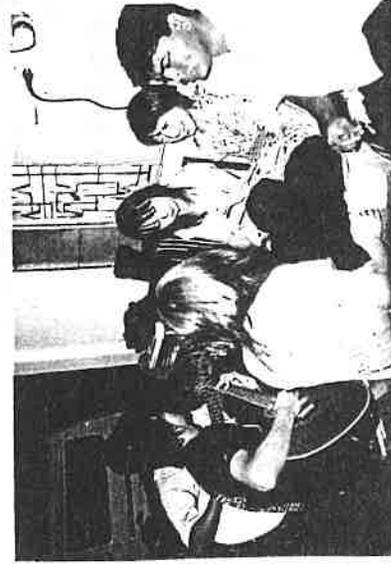
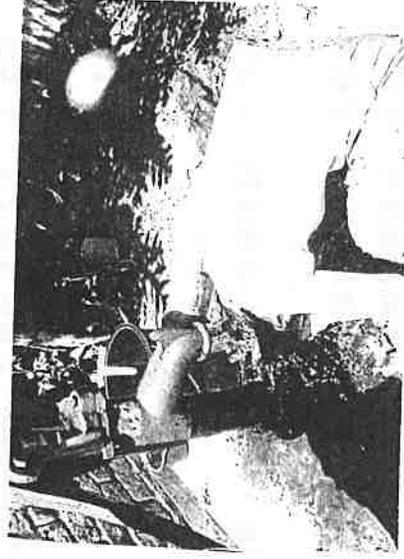
バン格拉デシュでの14日間。
私達は毎日このような生活を送っていました。



42食カレー生活。日に日に
右手で食べる技術も上がり、
手は良い色付きをみせてま
した☆みんな食後のチャイ
は何杯お代わりしました？



水源は全てこの井戸。必要な分
だけ汲んだことで、水の大切さを
学習しました。頭を突っ込ん
で洗髪すると、水の冷たさに関
動し至福の時間が味わえます。



Free time には近所の子ど
もとボール遊びやお宅訪
問・買い物など。オフィス
スでは毎日音楽が流れ、言葉
の壁を越える威力を発揮し
ていたのです♪

◆◆☆◆◆◆◆ランキング◆◆☆◆◆◆

Aチーム (ネトロコナ)

- Q01. 食いしん坊な人は?・・・あやかちゃん、増田さん
Q02. 笑顔が素敵なのは?・・・めいちゃん、丹羽さん
Q03. おちゃめな人は?・・・田坂先生、丹羽さん
⇒2人ともおちゃめな笑顔が可愛い!
- Q04. しっかり者は?・・・きなこちゃん
Q05. ベンガル人っぽい人は?・・・亜土さん
⇒ジャパニーズファッションがまるでサロワカ!?
- Q06. なんでもやさんは?・・・増田さん、丹羽さん
Q07. インテリな人は?・・・田坂先生
Q08. ニキルさん大好きな人は?・・・亜土さん、馬場さん
Q09. よく眠る人は?・・・あやかちゃん
Q10. 英語が上手い人は?・・・亜土さん
Q11. どこでも生きていけそうな人は?・・・あやかちゃん、馬場さん
⇒アジアがとっもお似合いのお2人。
- Q12. サロワカが似合う人は?・・・めいちゃん、亜土さん

Bチーム (ジャマルプール)

- Q01. 髪が似合う人は?・・・中川さん
⇒言うまでもなく!お洒落な髭の代名詞、中川さんです!
- Q02. 私たちの母的存在は?・・・和子さん
Q03. ある意味物知りな人は?・・・山匂さん
⇒バンガシルマニアでもあつます。
- Q04. 天使の微笑みの持ち主は?・・・トマトさん
Q05. よく食べるのにとっても細〜い人は?・・・ちえろきさん
⇒食欲旺盛なのに華奢なスタイルの持ち主!なぜ?
- Q06. いっぱい蚊に刺された人は?・・・まなみちゃん
⇒彼女の足には無数の刺され跡が!ムヒもいけどやっぱりキンカン!
- Q07. 恋愛話が大好きな人は?・・・りさちゃん
Q08. 愛されキャラで萌え〜な人は?・・・もえみちゃん

0 チーム (カティラ)

Q01. 面白い人は?・・・のりこさん

Q02. 子どもが大好きな人は?・・・まゆこさん、ヒロさん

⇒可愛い女の子たちにいつも囲まれているヒロさん。数々の日本語を教え、教師魂を發揮!

Q03. よく寝る人は?・・・もえこちゃん

Q04. よく踊る人は?・・・なつみさん、塚本さん

Q05. カメラの準備が万全な人は?・・・あゆみちゃん、塚本さん

⇒あゆみちゃんは約 1600 枚のデジタルカメラ、インスタントカメラ数個。

⇒塚本さんは 2006 年にちなんだ 2006 枚撮影したそうです。

Q06. 英会話が上手な人は?・・・まゆこさん

Q07. バングラ風のおべつが上手い人は?・・・塚本さん

⇒カレーなどで汚れたお皿は、指でお掃除をしてピカピカにします!

Q08. 名言大賞は?・・・あゆみちゃん、のりこさん

⇒「ポリポリ〜」「もじゃ…ですよね?」など、あゆみちゃんのかわいい台詞でみんなの口元がつい緩んでしまう〜

なんでもランキング

Q01. おいしい食べ物は何?・・・カレー、ルティ、

Q02. おいしいフルーツは何?・・・マンゴー、バナナ、パイナップル

⇒カティラでは、バナナに種がごろごろ入っていました!

Q03. 何度も歌った歌は何?

・・・幸せな手をたたこう、大きな栗の木の下で

⇒小学校などで日本語&ベンガル語でよく歌いました。振り付けも一緒にやりました。

この曲を知ってる子どもたちが多かったので感動〜

Q04. よく使ったベンガル語は何?・・・ドンノハット!

⇒コミュニケーションをする時けっこう使います。大切な言葉。

Q05. 焦った体験は何?・・・洪水、停電、蚊に大量に刺されること

⇒シャワーやトイレ中に停電になるとかなり焦る!

Q06. 驚いたことは?・・・子どもたちのダンスが一流!

日々の暮らしとスタディツアー

中川 英明

今朝は、西早稲田のACEF事務局へ通う電車が途中で止まってしまいました。あとから「お客様の間でトラブルがあり…」という説明がありました。東京の朝の通勤電車に乗っている人たちは、みんななんとなく不機嫌な顔をしています。とても不機嫌で明らかにイラついている人も、たまにいます。そんな人たちの間に、なにが起き行き違い、おそくそれとも些細なことがあり、それが原因となって、静い動きのたのでしよう。多勢の不機嫌な顔をした人たちに囲まれながら通勤していると、バンクラッシュでニコニコ顔の人たちや子どもたちにもたれに困まれて過ごした日々とのギャップがとても大きく感じられます。どうして東京の人たちはこんなに不機嫌な顔をしながら暮らしているのか。なぜベنگガルの人たちはあんなにニコニコしながら暮らしているのか。なぜ東京の人たちは知らない人をこんなにまで無視あるいは拒絶するのか。どうしてベنگガルの人たちは知らないほくたちをあんなにまで受け入れてくれるのか。ぼくはここ数年このようなことを疑問に思い、その答えはどこにあるのだろうかと思いつながら日々を過ごしています。スタディツアー中、毎夜行なったシェアリングで、大学生・高校生メンバーが話してくれたことの中に、そして、ここに集められた感想文の中に、このことを考えるためのヒントが沢山あるように思います。

今回のツアーの間に、「8月や6日9日15日」という川柳を、塚本先生に教えていただきました。毎年、夏のACEFスタディツアーの日程は、終戦記念日をはさんで組まれます。数年前までは折りがあらず日だったこの日は、最近では、いろいろなことを考えながら過ごさねばならない日、何か行動をおこさずには通り過ぎることができない日にだんだん変えられて来てしまいました。バンクラッシュの独立のための戦いのことも学ぼうという問題提起がメンバーからもなされましたが、日本に暮らすわたしたちにとっても、戦争と平和の問題を学び、考え続けることは、この先の数年から数十年の間に、これまでももって重要になることでしょう。

さて、2006年8月の第31回スタディツアーは、船戸先生(前ACEF事務局長)が参加なさらない初めてのスタディツアーでした。4月から事務局長としてはたつき始めたぼくにとっては、責任者として参加する初めてのスタディツアーということになりました。頼りになるリーダーであるよう心がけ努力したつもりですが、実際はどうだったでしょうか。なにはともあれ、事務局の井上さんや理事の田坂先生、ペテランスタディツアーの和子さんやヤマジュンをはじめとする参加メンバーのみなさんに助けたいだけながら、豊かな学びの旅の日々を共に過ごすことができました。どうもありがとうございます。第31回スタディツアー参加メンバーのみなさん、これからはBDPとACEFをいろいろな形で助け、支えてくださるようお願いいたします。それでは、アバール・デカ・ホベ。

心が動く関係

井上儀子

こんなにホットでこんなにウエットなスタディーツアーは、今までのスタディーツアーの中で初めてではないだろうか。今夏はベンガル人もうなるほどの暑さで、南のカティラ地区は湿度98%！汗がたらたらというより、もうびしょぬれ状態。水浴びをする時に水を頭からかけている時だけは最高に快適なのだが、服を着る段階でもう汗が出てくる。そんな湿度のせいで心まで少しウエットになってしまった気がする。

チームで劇をする準備をしてきたのだが、シナリオや動きが呑み込めず、無理をしないで少し練習をしてからにしよう、最初の学校訪問では劇の公開はしなかった。ところが子どもたちが「大きなかぶ」の劇をしてくれて、その上手なこと！みんな本当に役者になりきって、ジェスチャーも言葉もはつきりとわかりやすく、その上手さに圧倒されてしまった。でもそのおかげで、私たちは刺激されて一段と劇に取り組み意欲が盛り上がったように思う。3日目の学校訪問で初公開の劇は大歓声を浴び、隣の高校の先生方まで駆けつけて見てくださった。最後の日には小道具（洪水を表すブルーシート）を忘れてしまい、できないかと思いきや、スタッフが村の人から調達してきてくださり、村での最後の劇をするこゝとができた。その後子どもたちにメッセージを贈り「贈る言葉」を歌って村での学校訪問を締めくくる予定だった。ところが不覚にも歌いながら涙がほしい、終わった後はメンバーがみな一緒に泣き出してしまった。その午後、カティラ地区の先生方30人ほどが集まり、共に活発な意見交換がなされた。その最後にも、お互いに向かい合いながら、先生の涙を見てメンバーが泣き、メンバーの涙を見て先生が泣き、と感染していき、涙と笑顔の混じりあった別れとなってしまった。

カティラを去る朝、村の子どもたちは早くから集まり、別れを惜しんだ。この情景はいつもの通りなのだが、泣いているのはメンバーだけではなく、村の子もたちも泣いている。涙を浮かべるだけではなく、声をたててわんわんと泣いてメンバーにすがって、私たちの乗り込んだランポー（小さな乗り合いバス）のところまで押し寄せ、離れようとしなない。こんな光景は初めてだ。確実に心が動く関係ができたのだと実感した。メンバーの一人ひとりがかんだんと心を開いて、同じ目線で子どもたちと、先生たちと、村の人たちと接することができた証しだと思う。こんな貴重な経験を共にできたメンバーに感謝いっぱい！

バンングラデシュに魅せられて

高崎和子

私はいつもなぜ、今又バンングラに行くのか?と問いかけています。なぜなのか、解りません。教会の桜井牧師に、「今行きたいと思う気持ちは神様がバンングラの地に遣わしてくださるのだ。」と、言われました。寺子屋の子供達、村人、そしてそしてBDPのスタッフの皆さん、私にとって、かけがいのない友人です。

今回はBチームのメンバーでジャマルプールを訪問しました。ダッカから車で4-5時間の静かな農村地帯でした。学校訪問は4年振りのため、4年生までの子供達は日本人が初めてとあってびっくりしている子、怖がっている子、小さな声を出して頷いている子、皆、目は輝いて、生き生きとしていました。集中して学ぶ子供達に、いつもながら感動しました。働किながら学ぶ子供から話を聞きました。女の子はタバコの紙巻を1000本4タカ、1日2000本で8タカ 日本円で16円の稼ぎです。その女の子からメンバーに質問がありました。「貴方の仕事は何ですか?」とでも考えさせられる言葉でした。男の子のレンガ運びは30タカ 日本円で60円です。大人の中に混じって、働いています。アルバートさんが、少年に「いつまでもレンガ運びをするのか?」と聞くと「いやだ。」と答えています。アルバートさんは「頑張って一生懸命勉強するんだよ。」とやさしく少年を励ましていました。

小さな子供達が働きながら学んでいる姿を目のあたりに思うことは、アルバートさんが言われた、「貧困は皆の心の中にある。どの様にしたら皆が平等になれるのか?」の問いです。私は又大きな宿題を持って帰ってきました。健康が与えられているうちはこれからもバンングラを訪ねたいと思っています。第31回スタディツアーの皆さん、BDPスタッフの皆さん、そして素敵な出会いを与えてくださった、神様に心から感謝します。

「希望と喜びの共有！」

田坂 興亜

私が始めてバンングラデシュを訪れたのは、1991年の第一回 ACEF スタディツアーに参加したときでした。アジアの国々には、1982~83年にJICAの派遣でタイに行きましたし、その後毎年のようにICUのタイ・ワークキャンプで、学生たちと一緒に行っていましたが、バンングラデシュとの最初の出会いはあまりにも強烈で、毎日がショックの連続でした。特に都市部で「バクシーシ！」と言って次から次に突き出される物乞いの手に、どうしようもない思いが重くのしかかってくるのです。一方、農村で、雨季米の田植えの横で乾季米が豊かに実っている風景を見ると、どうしてこれだけ大量のコメが生産されている一方で、多くの人々が飢えているのだろうか？という疑問がわいてきます。正義と公正が行なわれていない社会・経済構造が根本にあることを思わされます。長い間のイギリスによる植民地支配によってこうした構造が形成され、さらに、パキスタンによる収奪、優れた指導者たちの虐殺などが貧困の構造を作り出したことを考えると、そこからの脱却は容易なことではありません。

しかし、そうした中で、クリスチャンの女医であるミナ・マラカール先生によって始められた識字教育の活動は、最初 SEP と呼ばれ、現在 BDP と呼ばれています。この15年の間に大きく進展してきました。1991年、92年、93年に来たときには、まだ寺子屋の校舎がなく、好意的に自分の家を提供してくれる人の軒下や暗い室内を使っていたのですが、その後、教室の教室を備えた校舎が、プーパイル、ジャマルプール、カティラに次々と建設されました。1996年に訪れたときには、「生徒参加型」の社会科学の授業など、非常に革新的な授業が行なわれていました。多くの公立学校では、教師がテキストを読んで、これを生徒が復唱するという、旧態依然たる授業を行なっているのに対して、BDP がこうした先進的な授業方法を取り入れたのは、ヘモントさん、ファルークさんなどが加わって、寺子屋で教える先生の準備教育の質が飛躍的に高まったためと思われます。

今回、初めてネトコロナを訪れましたが、この地での活動が始まってまだ4年しかたっていないにもかかわらず、算数の掛け算の教え方など、良く訓練されたと思われる先生たちが自信を持って、質の高い教育を行なっています。また、子供たちも、学ぶ喜びを体一杯で表わしながら授業を受けていました。教室の数に制限があるため、生徒を半数ずつに分けたり、上級生・下級生で分けたりして、入れ替わりで授業を行なっています。一人の子供は、授業が終わって出て行くくとすぐに、入れ替わりの子供たちに紛れ込んで、また教室に入ってきました！もちろん、すぐ先生に見つかってしまいました！

15年前にマラカール先生が蒔かれた希望の種が、バンングラの各地で育ち、貧しさの底辺にいる子供たちに学ぶ喜びと、将来への希望をもたらしているBDPの活動を目の当たりにして、私たちもまた、その希望と喜びを共にすることができました。こうした機会が与えられたことを心から感謝しています。

生命を戴く

丹羽輝子

昨年の夏で私のスタディーツアー参加も最後！！と覚悟をしていたのですが、今年も参加可能となった私の喜びは大きなものでしたが、Aチームは儼子さんが呪文のように唱えていらしたネトロコナへ行くと決まり、私の呪文のカティイラはすっかり姿を消し、初めてのネトロコナへの期待は大きく膨らみました。

目を閉じると、どこまでも広がる青い空、南国特有のもくもくと湧き上がる白い雲、その下に広がる稲の緑がまぶしく光り、宿舎の前の人工池や、毎朝草を食べに来ていた茶色い牛や黒山羊の親子の姿が、昨日のこのように浮かんできます。

今年の私のツアーの目標は、ずっと続いている「共に生きる」というテーマをさらに深める事と、学校訪問で感じる。子どもたちが目を輝かせて授業に集中する力とその持続力はどのような所で育つのかという二点にありましたが、帰国した今、心に残っているのは、食の原点の一部を探る体験に変わっていました。

それはムルギルとのかかわりに端を発したことでした。ある日坊主頭の小父さんが羽をばたつかせている四羽の雄鶏をぶら下げて登場し、毎朝洗面をする井戸端への出入り口近くの扉の脚に鶏達の足に結び付けられた細い紐を結びつけ、白と黒のムルギルバッチャは放し飼いにして帰って行きましました。ご飯の残りをついばむ毛色の違った鶏たちの立派な赤いとさかや、子どもどももしたムルギルバッチャの仕草を眺めて楽しんでる中に、「もしかしたら？」という不安が始め、一羽減った日の夜は、しっかりと肉の、味のいいチキンカレーだったので、もしか？がやっぱり！となり、鶏達を眺める心も複雑なものとなりました。スタッフの方々の考案で魚釣りをし、小魚を一匹ずつ釣り上げた日は、その小魚が唐揚げされ、魚カレーとなりました。その小魚の池には実は体長50cmもあるような大魚も飼われていました。ある日、プロフェッショナルの漁師数名が網をかけて南国の強い陽の光を浴びて、ギラギラ輝きながら舞い上がる大きな魚を数匹捕まえました。その魚達もその日にいただく分だけ捕っておしまいでした。度々停電をする電力事情の中で、冷蔵庫などあるわけもなく、その時に必要なものを必要だけ用意することが当たり前のこととして行われています。この在り方は豊かさの中で、当たり前のように自由に生活している私たちの生活と、あり余るほどの無駄を出す日常生活を振り返って見直す、反省の時を与えられたと感じました。多くの生き物達が一つしかない自分の命を、私達に提供してくれている事は、息をしているものが息を止めるところを目の当たりにすると、好きだ嫌いだと言って残したり粗末にすることは、自分勝手な行為であり、田坂先生の有機農法の講義と共に強く心に残る貴重な体験の旅でした。一番身近な所から生き方の改善と取り組む新たな努力への新しい力を与えられ、心から感謝しています。

バングラデシュにおもいをはせる

横須賀学院小学校教諭 増田 恵子

「これは川ですか。」「いいえ、洪水です。」ダッカからプーバイルに向かう車の中で大きな水の流れに私は驚き隣の儀子さんに聞いた初の質問でした。国土の1/3が温暖化等で沈んでしまおうと言われている様をマイクロバスからずっと見続けていました。又移動のたびに思うことは、人の多さ、日本の約1/4の国土に日本と同じ位の人口。行く村、町でゆきかう人の多いこと。宗教上の理由で男の人が大多数でした。人の多いこと、人的資源、労働力となれば、と考えてしまいました。

ネトロコナでは、自然と人の温かさを感じた一週間でした。夕方、西の空に夕日が沈むと、東の空が夕焼けに染まり、雲の流れを見ていると一番星が耀き出し、遠くでは稲妻が光り暗雲がきのこのようです。蛍が姿を見せる頃、辺りもすっかり闇。街灯のない世界です。星が一一つつ生まれてきます。そして満月が上り始め、宿舎の前の池にその姿を映し出します。天の川を見つめています。さそり座の勇壮さとアンタレスの赤い輝きを目で追っています。そして夜にはかえるの大合唱。ある時は雷鳴と共に大雨。前の池があふれませんがようにと祈りつつ眠りにつき、翌朝は昨夜の嵐が嘘のようにキラキラの夏空。イモリの鳴き声は今となってはなつかしく思い出されています。

ネトロコナでの最後の夕食。日本のスタッフが現地スタッフへお礼の夕食を作ろうとみんなで考え食材を買出し、創りました。メニューは天ぷら（精進揚げ）オムライス（卵でくるまず）デザートはパイヤ。（内心慌れる！）箸がない。だし汁がない。ほうちょうは。おまけに薪。そのうえ停電。煙にいびきされ、暑さに耐え目から涙。気づいたらお料理担当の二人を「おばちゃん、おばちゃん〇〇！〇〇！」と叫んでいる私。目ものどもひりひりの会食でしたが、思い出いっぱいディナーになりました。

たくさんのBDPスクール訪問。ここでは目を輝かし、先生の言葉を真剣に受け止め、学ぼうとする子供たちの姿。先生方の熱意。繰り返し練習する言葉や単語、文章の暗唱できると、みんなで拍手。ジー（あってます）と学び姿勢・暖かさを感じました。

さて、教育のあり方は国の方向を決定する。国の方向によって教育のあり方が変わることを思うとき、「自ら問題を見つけ考え解決する力」を一人ひとり培い、人間としての幸せ、国の豊かさを創造する人となることを、このBDPスクールの教育を通して願わずにはいられませんでした。

フェルクさんは日本通。抹茶のセシモニー（のまねごと）に喜んで頂き、日本の文化を紹介する（！）交流もあることを知りました。外国人が大嫌いな“梅干”でも、バングラデシュのスタッフの方は、「食べられる！頂戴！」という方が何人もいてびっくり。

日本に帰って、よりバングラデシュのことを知りたいという思いが強くなり、本を注文で買ってパラパラめくっています。

聖書の字が見えない、早速換眼。4段階も進んでいてびっくり。早速作り直しこれで小さな字も読めます。思い出いっぱいツイアをありがとうございます。

あの笑顔にもう一度会いたい！ でもやっぱりマンゴーは美味かった

横須賀学院小学校教諭 山口 旬

私の勤める横須賀学院小学校でのACEFとの関わりも10年目をむかえ、子どもたちも「ハングラデシユならなんとなく知ってる」状態が普通になりました。半分趣味でやってきたといってもそうそではないのですが、実際にスタディツアーに参加し、国際交流というものに本腰を入れ始めたのは孔子の言葉そのままに三十路になつてから。今にして思えば若い二十代のときにもっとまじめに活動してたらもっと深みのある大人になってただだらうなあ。そんなことを下っ腹の出してきた様を見ながらつくづく思いますが、まあ人間は後悔するようにはできているのです。

私にとっては3回目のスタディツアー参加でした。最初に参加した4年前は見るものすべてが圧倒的な体験となり、半分趣味で取り組んでいた私の国際交流に対する考え方を変えました。これは趣味でおわらせるわけにはいかぬ、世界にはこういう生活の中で精一杯学校に通い生きている子どもたちがいるという事実を、うちのヤフなわがままなボクたちワタシたちに伝えねば、よし来年も参加してもっともつと真剣に取り組むぞ。ところが次の年はSARSで中止、そのまた翌年は出発3日前になつての洪水による中止。意地になつて参加した昨年は、いかに小学生に伝えようかと考えてビデオを持ち込んで撮影し、後日全校で報告会をしたりしました。さて、やたらモチベーションが高かつた昨年の自分を振り返って比べてみたとき、今年は何かが熱いものが足りない……ふと「今年は何しに行くんだろう」と一瞬答えずに戸惑いがありました。たしかに自分でも会話の端々に「半分仕事で来てるんですけどね」。う～ん、そうじゃないだらうなんか違ふだらうともやもやしたものを感じながらの最初の数日間。

それがジャマルブルでの学校訪問一日目。リキシヤに片道1時間以上も揺られながらの学校訪問で、大勢の子どもたちのなんともいえない笑顔に囲まれた一瞬、もやもやに対する答えが見つかつたような気がしました。そして農村での打ち解けて歌って踊つた（Bチームはメンツがメンツでしたので）ときのふとしたなになにげない光景。

最近の世相からして学校とは安全・防犯を第一に考え、知らない人とはとにかく疑つてかれという風潮が漂う昨今、初対面の人に対して損得ぬきにした裏表のない心からの飾らない笑顔はもう日本ではここ数年見えないかも。おそらく日本では決して容易には見られないであろうあの笑顔、4年ぶりの訪問ゆえに日本人を見るのは初めてという子どもたちが見せた笑顔。ああ自分はこの笑顔を見たくてはるばるここまで来たんだ。

国際交流とは、その国になにかあったとき心配できる相手を作ること。懐かしいBDPのスタッフの笑顔を見たとき、私はこの人たちに会いたくて来たんだ、この国には自分を歓迎してくれる人たちがいるんだと、なんともいえない感情に包まれたのでした。

でももしかして一番嬉しかつたのは完熟したおいしいマンゴーを食べた時かも……。口の中でとけました。ほっぺもとけました。あんまり美味しく食べ過ぎました。Bチームの人、迷惑かけてすみません。バセットさんごめんね。

『極彩色の世界』

高崎教会牧師 塚本潤一

今から20年前、JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）の宮崎亮医師が、当時私の牧会していた教会で講演をしてくださいました。「皆さんの家族が、川に流されていく時、皆さんは知らん顔をして、道の向こう側を通り過ぎることができませんか？今、バングラデシュでは皆さんの妹・弟が川に流されて溺れているのです！」八年間バングラデシュで医療活動に従事された宮崎先生の声は、涙で詰まってしまいました。その言葉をお聴きして私はハッとさせられ、いつの日か必ずバングラデシュをお訪ねしたい、と強く願ったものでした。

それから二十年後の今夏、ようやく念願がなってバングラデシュのスタディ・ツアーに参加させていただくことができました。海拔0mで温度100%の世界、特に夏は雨期なので、多くの場所が水没しています。しかしそれでも、宮崎医師からお聴きしたイメージからすると、ずいぶんと生活が整えられ、国全体が安定してきているように思えました。思えば宮崎医師がバングラデシュに赴任されたのは1980年、パキスタンからの独立戦争後十年もたっていない頃で、大洪水・飢饉に何度も見舞われた時代です。それから26年たって少しずつではありますが、国造りが進みつつあるのでしょうか。

ダッカ空港に降り立って思いっきり空気を吸い込んだ時、宮崎先生からいただいた大きな宿題を、今ようやく果たすことができます、という感慨が胸一杯になりました。初めてのバングラデシュは、詩情あふれる世界でした。しかもそれは極彩色の世界だったのです。極度の貧しさの中で、厳しい労働をしいられるバングラデシュの方々が、彼らには「詩」があります。感激した時、悲しい時、つらい時、いつも彼らは「詩」を作るのです。すると自然にそれにメロディがついて「歌」になります。その歌にたくさんの打楽器によるリズムがついて、素晴らしい「楽曲」となります。その楽曲に合わせて、見事な「踊り」がついていくのです。こうして、彼らは詩を吟じ、歌って踊って、自己表現をしていきます。その自己表現の世界が「極彩色」の芸術へと高められていくのです。

滞在中、カトリック教会とバプテスマ教会の礼拝に参加させていただきました。ともに極彩色の賛美と踊りからなる「礼拝」に、身も心も神さまへの感謝と賛美で一杯になりました。またヒンドゥー教の礼拝にも参加させていただきました。「詩人」が自作の歌を披露し、それを楽器隊が演奏し、踊っていく。大学で「ワールドミュージク」を学んだ私にとっては、ただ「そこにいる」だけで失神してしまうような恍惚の時でした。気がつくくと五百人以上の方々がその場におられました。長い労働を終えた人々が、寺院に集って歌い踊り、日が暮れる頃家に帰って夕飯を食べて就寝し、また日の出と共に仕事を始める。バングラデシュの方々の生活のリズムに、私たちが忘れてしまっていた人間本来の「生きる」リズムを覚えていただいたように思いました。私の宿題はやっと始まったばかりです。これからもバングラデシュに伺って、たくさん学ばせていただきたいと思っています。

幸せということ

共愛学園中高教諭 松本 拓

スタディー・ツアーを終えて、僕が日本に持ち帰ったものは、バングラデシユでの生活の中で出会えた、素晴らしい自然、バングラデシユの人々の暖かさ、子ども達の笑顔、先生方の熱意、BDP スタッフの素晴らしい教育への取り組みなど、言い出せばきりがないほどたくさん素敵なプレゼントでした。その中でもカティラでの一週間は、僕の心に大きな感動を与えてくれた素晴らしい経験となりました。

カティラでの毎日は、農村の子ども達との触れ合いが僕にとって一番の楽しみでした。朝から子ども達がやってきて「ヒロ！外に出てきて一緒に遊ぼうよ！」と僕を連れ出してくれたり、「ヒロ！これをあげる！」と、綺麗な花束や一生懸命に描いてくれた似顔絵、木の皮で作った大きなお面など、心のこもった贈り物をくれたり、一緒に池で泳いだり、ダンスを踊ったりと、子ども達に囲まれて過ごす時間が本当に大切な時間でした。また、BDPの現地スタッフの皆さんは、とてもあたたかい方ばかりで、様々なプログラムでの生活を歓迎してくれただけでなく、常にそばにいてバングラデシユでの生活を楽しむことができるよ、僕達を守ってくれていました。そんな様々な触れ合いを重ねながら、農村の一週間はまだまだ間に過ぎていきました。カティラを去るとき、BDPのスタッフとの別れに、子ども達も集まってくれて、僕の心にはみんなへの感謝の気持ちと離れなくてはいけない寂しさが込み上げてきて、涙をこらえきれませんでした。子ども達も泣いていました。一週間という限られた時間の中で、農村の人達と築くことのできたつながりは、僕にとっても大切なものとなっていただけでなく、本当に大きな幸せを与えてくれました。

文化も言語も違うバングラデシユで、日本でも手に入れることができないような大きな幸せを感じることができ、僕は幸せが人とのつながりによって作られるものであり、それに必要なのは『人を思いやる心』だということを再確認することができました。バングラデシユは貧しい国と言われていますが、僕の感じてきたバングラデシユは、そうではありません。『人を思いやる心』に溢れ、幸せに溢れた豊かな国です。バングラデシユを訪れ、その幸せに直に触れることができ、たことを、これから生活していく中で自分を支える力にし、お互いを思いやり、人に幸せを与えられるようつながりを、今度は日本で築くことができるようにしていきたいと思います。そして、幸せということを教えてくださいました。バングラデシユに、きつと戻ってきたいと思いません。

最後に、この素晴らしい機会を与えてくれた ACEF の皆様に感謝し、スタディー・ツアーのまとめにしたいと思います。ありがとうございました。

「初心にかえることの大切さ」

東京女子大4年 馬場 智子

私は今回初めてバンクラテシユへ訪問したのですが、この地での生活を通して最も印象に残っていることは、2人の少年との出会いです。1人はダッカの空港に到着した後、バスへ移動するまでの間、私達へ手を差し伸べながらどこまでも付いてくる物乞いの少年。2人目はネトロコナで出会った勉強熱心な少年です。

ダッカ空港で出会った少年は、まだ5、6歳ではないかと思われませんが、自分のお腹をさすりながら私達に必死にお金をねだって付いてきました。見ないようにと歩いてもうろうとも視界に入り、仕舞いには私の腕に触れながら近寄ってきたがため、私は正直全身がぞくぞくとしてしまい、今でもその感覚が鮮明に思い出されるほどの衝撃でした。そういう子どもに対してはかまわずに歩きなさいと言われていたのですが、やはりここまでねだるのに完全に無視し続けながら歩く自分に対して罪悪感を持ち、けれどだからといって何もすることかてきない自分へのシレンマから印象深かったのだと思われま

す。

一方、ネトロコナで出会った少年は学校で覚えた英語をうまく使って、私達へ必死に話しかけてきてくれました。会話の空気をよみながら話す彼の姿はとも4年生とは思えないほどの印象を受けました。別のときに彼と会った際は、どうやらお遣いの途中のようで、私は彼を呼んだのですが当然来てはくれませんでした。きちんと自分の責任を認識しているが故に、まるで大人であるかのような言動が半うのであるのではないかと感じました。

以上のような二人の少年と出会ったことで、私は多くのことを彼らから学びました。初めは物乞いの姿を見てただ衝撃を受けてしまいましたが、よくよく考えてみると、彼は生きていくためにどうにか自分の力を駆使しようとしているかのための行動だったと解釈しました。自立しようとする気持ちの強さは、あの大きな目からも私の心にずっしりと伝わり、私自身を引き締める気持ちに拍車を掛けることとなりました。また、家の仕事があったとしても学びたい、そして新たな自分の可能性を広げようとする姿は本当に生き生きとうつりました。新しいことを学べることへの感謝の気持ち、そしてそれを習得したときの喜びがいかに大きいのかを少年の積極的な態度によって再認識させてもらいました。

14日間の生活を終えて日本に帰って来たとき、しばらくはワンテンポ運い生活が続きました。というのも、例えば蛇口をひねれば水やお湯が簡単に出ること、また電球が切れない限り電気はいつまでもつけたままの状態で保てることなど、一つ一つのこと感動していたからです。そのため、日本での自分の生活を振り返ると、どれだけ文明の発達に対して無関心のままで暮らしていたかを如実に感じるようになり、寧ろそんな自分が恥ずかしくなりました。日本で生活していると、何もかも容易に手に入れることができる環境で暮らすことができます。しかし、それは全て自然発生的に実現しているのではないことをしっかりと認識し、感謝の気持ちを大切に持ち続けようと強く感じました。

最後に、私はこの地で出会った全ての子どもたちのことは一生忘れません。これからは、私の人生に多大な影響を与えてくださったことに感謝し、その彼らが成長と共に平和な生活を送れるよう祈り続けたいと思います。

～ここに種を蒔くということ～

東京女子大3年 河田 祐惟子

バングラデシュでの出来事が、まるで夢の中の出来事だったかのように感じられる。それは、あまりにも過ぎた時間が素敵だったから。あれほど、ところを開けっ放しにして過ごしたことが、かつてあっただろうか。感じたことを伝え合い、手をつないで笑い、言葉が通じなくても、歌ったり踊ったりして通じ合える。バングラデシュでは、いつも周りに人がいた。ツアーの仲間たち、BDPスタッフ、子供達…。人と一緒にいることが、あれほど心地いいこととは知らなかった。そして、人と別れることが、あれほど寂しいことだということも知らなかった。

私はこのスタディーツアーで、バングラデシュについて学ぼうと思って参加した。しかし、気付いたことは、自分のところが今までいかに貧困であったか、ということだった。私は、「自分には知らないことがたくさんある」ということにすら、今まで気付いていなかった。私は、戦争を知らないし、子供達が労働者として扱われる社会を知らない。電気や水はどうやって私たちのものにきているのか、ゴミはどうやって処理されているのかを知らない。ニフトリや牛がどうやって殺されているだけで、そのことについて深く考えることはない。ただ、知識として知っているふりをしているだけで、私たちが食卓に並ぶのかを知らなるとは日常生活でなかった。私は、バングラデシュで、ムルギル(ニフトリ)が首を切られ、生死をさまよう壮絶な場面を見た。そこで、自分という存在がたくさんの生命を犠牲にして成り立っていることを思い知らされた。お店で「チキンカレー」を食べようか、「ビーフカレー」を食べようかと迷っていた自分。その前に、苦しみながら死んでいったニフトリや牛のことなど、少しも考えていなかった。今まで心から感謝をするということに鈍感だった気がする。自分一人では生きていくことなどできないという感謝の気持ちをも、この2週間で痛いほど感じた。そして、自分のところは、こんなにも色んなことを感じるすることができるのだということに驚いた。

このツアーによって、私のところは様々な経験によって耕され、たくさんの種を埋めてくれることができた。その種の、芽を出すことができるだろうか。花を咲かすことができるだろうか。私のスタディーツアーは、まだまだ終わりそうにない。

そして、いつかは“花さかじいさん”のように、まわりに種を蒔きちらせるような人になりたいと思う。

お世話になったスタッフの方々、ツアーのメンバーの皆様、本当にドンノバット(ありがとう)！そしてバングラデシュで出会った元気一杯の子供達、またいつか、エクスチャネ ケルベ(一緒に遊ぼう)！

一本当の豊かさとは一

東京女子大2年 高橋 麻由子

バングラデシユを思い続けて約5年。ついに念願のスタディーツアーに参加することができた。行く前まではバングラデシユという国を、発展途上国というカテゴリーに入れて考えてきたが、私が今まで想像していたバングラデシユはそんな領域に入れてはいけないものだったのかもしれない。確かに生活、経済、交通面などで不便な点や、発展していない点もあったが、何がバングラデシユの人たちにとって必要なのか、大切なのかを考えるとすごく私の視野が狭かったことを感じた。どこの学校を訪問してもプレゼントされるたくさんの綺麗な花束や花輪、車や人力板に乗っていて目が合えば皆優しい笑顔で挨拶してくれ、言葉が通じなくても一生懸命何かを伝えようとしてくれ・・・バングラデシユにいる時の私は日本で生活していたより何十倍も豊かな気持ちになれていた。決して日本の生活に不満を持ったりしていた訳でもなく、何一つ不自由なく暮らしていたはずなのに、バングラデシユでの生活は満ちていたのだ。また一つ得たこともある。それは、笑顔の魅力に気付けたことだ。こんなにも微笑んだり、笑い合ったりすることが気持ちの良いものだったのかと、改めて私は笑顔の力の素晴らしさに気付いたのだ。カティラに向かう途中で体験した物乞いも、みなが生きていくためにしていること。それを周りの人が非難したり止めさせたりするのではなく、そういう人々も社会に受け入れられているかのように、物乞いの人々を支えている人もいる。少なくとも私たちが滞在した期間の中で分かることは、バングラデシユには私たちが忘れかけていた物があり、また豊かな心を持った人々が数多くいる。そんな国を私は日本の様な先進国にしたいと考えていたのだ。このバングラデシユが先進国の仲間入りを遂げたら私たちが見て、感動した一面に広がる水田や美しい木々、川で洗濯したり魚を釣ったりする子供や大人の姿も無くなってしまいかもれない。私はこれから、バングラデシユにとっての本当の豊かさを守りつつ、子供たちの教育支援に力を入れ、これからもこの国と繋がっていたいと思う。現地でお世話になったBDPのスタッフ、各小学校の先生方、ACEFさん、そして向こうで出会った全ての子供達や人々に心から感謝したい。本当にありがとう、そして・・・バングラデシユ大好き！！

“スタディー” ツアーでの出会いから

青山女子短大2年 福井千紘

柵に手を掛ける大勢の人、私たちを追う目・目・目…、長時間の空旅を終えダッカリに降り立ち、暗く蒸し暑い中で初めて目にした光景は衝撃的だった。荷物を横む間も物乞いの母子が近づいてくる。ぼろぼろの衣服に汚れた裸足、上目遣いに右手を出す姿を無視するなんて出来ない。バスに乗り込みパーバイルへの道を行く時も、ガラス窓1枚を隔てて向こう側にある風景はまるでテレビ画面の様で、目の前にある現実を現実としてはっきりと捉えられていない自分がいた。でもその時、ここでの生活全てを受け入れたらいいと思った。

ほんの少しの不安をよそに、毎日の小学校訪問はとても楽しみなものだった。日本がどこにあるか、むしろ日本という国があることを知らない子供たちも想像以上において驚いた。見たこともないタイプの人間が突然現れ自己紹介をしている…、状況を飲み込まず法えて固まる子供たちを前に折り紙や歌・劇を披露するのは結構緊張した。何せ言葉が通じないから、身振り手振りに頼るしかない。だがそれでも私たちの必死の姿が伝わってか、次第に子供たちの笑顔は増えた。別れの時には色鮮やかな野花を摘んできて、両手で持ちきれないほどプレゼントしてくれた。大きな目を見開いてまっすぐ黒板に向かう真剣さと、どんな時もたった1本の鉛筆を握り締めて離さない小さな手は絶対に忘れない。

また、生活面でもこれといって不便さは感じず、正直心地よいとすら思っていた。ただ、ジャマルプールに於いて私たちが出したゴミは畦道に放り出されてしまい、結局自分たちで拾い集め燃やした。ふと、思った。美しい自然残るバンングラデシユを壊しているのは、つまるところ先進国の文化なんじゃないか? ちよっと悲しくなった。思い出せば確かに楽しいだけでなく、日々発見の連続で学ぶことも多かった。食事を摂る・寝る場所がある・学校に通う・仕事がある・自分の不必要なものをゴミとして捨てる、それらを当然として日本で暮らしてきた私は、しばしば自身の目を疑った。騒々しいくらい栄えている街にも、溢れる人に混じって悲しげな目を向けてくる人がいる。日本人が大きな買い物袋をぶら下げている横で、それを羨ましがりが恨めしげにかじっと見る。安価な労働力として使われる子供たち、至る所に積まれたゴミの山…、バンングラデシユの貧富の差そして労働と賃金の不均衡、環境問題までもがすぐ傍にあった。

私はこれから、バンングラデシユで目にし耳にし触れて感じたことを少しずつでも周囲に伝えていこう。自分のためだけに学んだのではない、ほんのひとかけらからかもしれない。私1人が学んでいるという事実は決してちっぽけではない。

2週間はあっという間に過ぎてしまった。四六時中BDPスタッフに守っていただき、いつも安心していたられたことと、数え切れない方々からののおもてなしに感謝したい。さらに、今回ツアーを共に出来た仲間にも恵まれていた。みんなみんな、ありがとう! バンングラデシユでの生活は、私の人生を変えた。人の生きる力強さと喜びを見た。人の優しさとあたたかさを肌で感じた。人間として成長できたことと実感する。勿論これからの成長をやめないために、もっともっと学びたい。誰かの力になりたい、1人でも沢山のひとが笑顔になってくれればと願う。

どうか皆様、世界中の1人ひとりにあなたの御恵みがありますように。

バンングラデッシュでのたくさんの出会いに感謝

青山女子短大2年 高良 亜士

今回のスタディツアーは、人の温かさ、優しさに触れた旅だった。

BDPのスタッフは私たちを温かく迎えてくれ、私たちが安全に楽しく過ごせるように、いつも行動を共にしてくれた。子どもたちは、オフィスまで花を片手に遊びに来てくれたり、学校に行くと「ここに座って！」とイスを空けてくれたり、私たちを笑顔で迎えてくれた。

BDP スクールを訪問して印象に残っているのは、生徒一人一人に目を向けて熱心に教えている先生の姿と、それに応えようと一生懸命に耳を傾け、先生をじっと見ている子どもたちの姿である。

勉強をしている子どもたちの瞳は、何かを得ようという意欲と学びへの情熱でキラキラと輝いていた。教室に入る度に、私はその輝きに圧倒されていた。こんなに学ぼうという思いを持って学校に来ている子どもたちがいるのだから、そこにある輝きを失わないように、そしてもっと多くの子どもたちが学べるようにしていかなければならないと実感した。だから、このスタディツアーを第一歩として、これからもバンングラデッシュを訪れて経過を見ていくことが必要であると思うし、支援だけでなく、ACEFを通してBDPの活動に協力していけたら・・・と思う。

また、このスタディツアーでは数えきれないほど多くのことを目で見て、肌で感じて学んだ。バンングラデッシュの子どもたちに行き届けることが何かを考え、一つでも多くのことを実行していくことをこれからの自分自身の課題にし、今回のスタディツアーで学んだこと、体験したことを今後の学びに生かしていきたい。

バンングラデッシュで過ごした2週間は、シェアリングなどを通していろいろな人の考えを聞くことができ、自分自身の視野を広げることができた。本当に貴重な時間を過ごせたことを嬉しく思っている。

バンングラデッシュという国との出会い、子どもたちとの出会い、BDP スタッフとの出会い、そしてスタディツアーを共にしたメンバーとの出会い、このツアーにはたくさんの出会いがあった。この夏に与えられたたくさんの素敵な出会いに心から感謝し、私の宝として心の中に積み上げよう。

生きるということの大切さ

青山女子短大2年 千葉 なつみ

バン格拉デシユについて色々誤解していた部分があった。しかしそれは私だけではなかった。2週間しか居られないことをこんなに悔しく辛く思ったのは初めてだった。これら私のバン格拉デシユに行った正直で簡潔な感想である。バングラに行く前は、治安の悪い国だとかイスラム教信者の多い国だとか洪水の多い国だとか、そんな曖昧な情報しか持っていたが、それらの情報に共通して言えたことは、決して印象は良くないということだった。

バングラに到着してすぐ、その情報は当たっていたと思った。物乞いに囲まれ、みんなが物珍しそうにこちらをじっと見つめている。空港からバスでダッカ市内を走っている時に見た混沌とした光景。日本では考えられないものが次々と視界に入ってきていつまでも残像として残る程衝撃を受けた。この国で2週間も過ごすのかと思うと不安だまらなくなつた。

だが、その気持ちはすぐに消え去つた。どこに行く時も現地のBDPスタッフさんか私たちの安全を守ってくれ、いつも私たちのことを氣にかけてくれた。お互いがお互いを助け合い、思いやり、笑わせ合い、ちょっとした時間もみんなまで遊んで時間を楽しく過ごす。これがバングラの人たちの心なのだと思います。すごく心が暖かくなつた。そして、年齢も性別も違うのに30人近くの人間がこんなに仲良くなれたのも、バングラだからこそなのではないかと思つた。

チームでカティラに行った時、英語の喋れない私は、スタッフの皆さんと喋ることが出来ず、チームの子としか喋らなかつた。しかし、毎日様々な小学校を巡り、子供たちの笑顔と純粋な心に触れ、言葉ではなく気持ちで通じることが大切だということを教えられ、言葉が通じないからといって喋らない自分かもつたいたいと感じるようになった。それからはスタッフともジェスチャーを交えながら喋るようになり、冗談を言ったりイタズラをし合ったりする程仲良しになれた。そして、宿舍の周りにはいつも子供たちの笑い声や笑顔が溢れていた。朝起きると、子供たちが私たちを出迎えてくれ、小学校から帰ってくる私たちの姿を見ると、走って駆け寄ってきて手を繋ぎ、溢れんばかりの笑顔で私を見つめる。時間の空いた時には宿舍の前の池で水の掛け合いをしたり、折り紙をしたり、手遊びを子供たちから教えてもらったり、とにかく子供たちと居る時間が多くとても楽しかつた。

バン格拉デシユは貧しい一面も持っていた。カティラへ向かう途中のバスでは、ずれ違ふバスの屋根にまで人が乗っていたり、バスの座席シートが真っ黒になつているものがあったり、身体に障害を持った人がバスの中に入ってきて物乞いをしたり、靴を履いていない人がいたり、挙げればきりがない程貧しさがあつた。けれども、どれも目に見える貧しさであり、心の貧しさはなかつた。

このスタディツアーはバン格拉デシユの持っている目に見える貧しさを学び、私たちの持っている目に見えない貧しさに氣付かせてくれた。バン格拉デシユは私たちには容易くは想像出来ないような現実があり、障害者に対する制度や子供に対する教育制度、様々な制度も未だ確立されていない。貧困にあえぐ人、物乞いをする小さな子供、病氣にかかつても治療出来ない人が世界には沢山居るのだということ。食べたくなくて食べないのと、食べたくても食べられないは大きく違い、死にたくて死ぬのと、死にたくなくても死ぬのは大きく違うのである。日本ではおじいちゃんおばあちゃんになるまで生きているのが当たり前だが、バングラではそうではないということ。この2週間で生きることの大切さと難しさを学んだ。今度このツアーに参加するときは、私には沢山の課題が残されたので、日本ではその課題に1つずつ取り組んでいきたいと思う。

「ネットロコナでの思い出」

東京女子大1年 樋口 木菜子

私たち A チームは全員で滞在したオフィスのあるプーバイルから車で約5時間ほどかかるネットロコナというところへ行きました。ネットロコナは自然がとても素晴らしいところで、遮るものなく続く田園風景が一面に広がっています。ここで過ごした6日間は短い期間ではありませんでしたが、一日一日が昨日のこのように思い出されます。

ネットロコナにBDPの学校が最初に建てられてからまだ4年目ということで、私たちが訪問したのはわずか5校でした。しかし、どの生徒もみんな大きな目をキラキラさせて熱心に勉強に取り組んでいて、学ぶ意欲を感じさせざる雰囲気です。思わず圧倒されてしまいました。こちらにも負けてばかりはいられないので、ベンガル数字をみんな教えてもらい、算数の時間掛け算に挑戦していると隣に座っていた男の子が手伝ってくれました。また私たちの存在に少々緊張していたのか、中には話しかけてもあまり答えてくれなかった子供もいたのですが、一緒にベンガルソングを歌っているうちに私が歌詞を間違えると一生懸命教えてくれたりするなど子供たちの優しさを感じずにはいられない毎日でした。

またBDPスタッフのハビズさんとマムーンさんに授業のことについて質問をすると、丁寧に色々なことを教えて下さり、その様子からは本当に自分達の仕事に誇りを持っているということが伝わってきました。授業に目を輝かせ集中する子供達、その授業をつくっている先生達、そしてそれをサポートするBDPスタッフの存在。この3つのどこか一方通行ではなく、きちんとひとつのサイクルをなしているのを目の前にして、私は胸が一杯になりました。また時には授業中に知らないおじいさんが入り込んできたり、近所の大人が先生の代わりに子供を叱ったり、違うクラスの生徒が紛れ込んできたりするなど日本では決して考えられないような光景が見られました。が、何よりもそれはBDPの学校を中心としてひとつのコミュニティができてきている証拠のようにも思えました。

プーバイルに帰った後、ACEFの儀子さんがBDPの学校の子供達にアンケートとして聞いた答えの中に、“日本人の人達が学校にきたことが良かった”というコメントがあったそうです。ネットロコナでの学校訪問を通して、私達もBDPの活動の役に少しでも立てていたら嬉しいな…。そう思いながらも、今ではあの子供達の大きな笑顔が懐かしくてたまりません。

最後にとても印象に残っていることと言えば、ネットロコナで過ごした夜の事です。大きな月や宝石を散りばめたような満天の星、そして飛び交う虫。そのような夜をスタッフやメンバーの人達と共有できたことは絶対に忘れません。本当にこのような素敵な6日間で与えられたことに心から感謝しています。“言葉は問題じゃないよ”と私のつたない英語に静かに耳を傾けてくれたダッカスタッフのアールークさん、一緒に料理をした時には心が通じ合えたような気がするおぼさん達、いつもさわやかな笑顔で接してくれたアナールさん、私がこのネットロコナで一生の思い出となる貴重な時間を過ごすことができたのも彼らの存在のおかげなのだと思います。本当にありがとうございます。

「眩しい笑顔」

立教大学1年 落合真奈実

日本に帰国してまた元の生活が始まろうとしている頃、改めて自分に「今回のスタディツアーを通して私はどんな事を得て来たのだろうか？」と問いかけてみました。実際に得られた事は本当に沢山あります。例えば、自分の人生に対して真剣に向き合おうとする事。自分たち日本人が経済的に恵まれていることを身を持って知り、同じ地球という共同体にいる以上、自分の事だけではなく世界にもっと目を向けなくてはいけないという事などです。その中で私が最も素直に感じ得た事は、人と人との交わりの中で生まれるもの大切さについてです。

バンングラデシュ滞在中の全ての時間を、現地のNGO団体であるBDPのスタッフの方々と共に過ごして来ました。彼らとコミュニケーションをとるのには、私の覚束ない英語、そして簡単な単語しか知らないベンガル語しかありませんでした。しかしそのような状況の中でも一緒に歌を歌ったり、踊ったりすることで言葉の壁を乗り越えることが出来たように感じます。日本に帰って来てからは、現地で歌っていた曲を聴いたり、一人一人の顔を思い出しては「どうしているかな？」と心配したり、二週間で築き上げられた「友情」のようなものを今ひしと感じています。

この事はBDPスタッフに留まらず、訪問先の子供たち、先生などバンングラで出会い、触れ合った全ての人たちにも言えます。最近、編集委員で沢山のバンングラでの写真を見ていて、本当にこの国の人たちは自然と心から笑顔が作れているのだなと改めて思いました。私が日本で写真を見て、彼らのことを考え、もう一度会いたいと強く思うのは、きっとこの笑顔が本物でとても素敵だなと思うからだと思います。

ジャマルプールの学校を訪問した時に、今でも脳裏に焼き付いている位とても印象的な一人の少年に出会いました。彼は私たちを見た瞬間から学校を去る最後の最後まで、つぼにはまったように笑い続けていました。それは本当に楽しんで自然と大きな笑い声が出ているように見えました。

日本では新しい人と会って話をしても、なかなか最初から本当の笑顔はうまく出せません。少し相手を警戒してしまったり、まだどんな人か分からないと慎重になってしまふところがあると思います。しかしバンングラの人々はすぐに親しくなってくれて、心から気持ちのよい笑顔を振りまいてくれます。そんな彼らを見て私たちも自然と心から笑顔が溢れていきます。

交流する中で生まれる自然な笑顔が、私をもう一度バンングラへ行きたいと強くさせているのだと今回のスタディツアーでよく分かりました。この笑顔が消えないように、遠く離れた日本からバンングラのことをずっと考えていきたいです。

バンクラデシユで得たもの

青山女子短大1年 石澤 萌依子

発展途上国に興味があり、いつか行ってみたいと思います、今回のスタディーツアーに参加しました。「貧困」という現状を理解しているようでも、実際に足を踏み入れて体験してみないとわからないことがたくさんあると思います。

空港から出ると、一人の少年が現れ、私たちの方に近づいてきました。その少年は、非常に痩せていてお腹を空かせているようでした。細い腕を差し出され、私たちの何かを求めてきました。こんなに貧しい子どもたちが生存していて、どうして世界は平等なんだろうと思います、私は目に涙を浮かべられるほどでした。

カティラでは、短期間なのに子どもたちが私たちにとてもなついてくれて感動しました。ふだん私は、子どもと接する機会があまりないので、兄弟のように一緒に遊びました。子どもたちは、とても楽しそうで、一日に何度も私たちのところへ訪れてくれました。ずっと手を繋いで歩き、わからない言葉はジェスチャーで伝え、身体によるコミュニケーションができました。子どもたちの笑顔を見ると、心の奥から素直に楽しんだり喜んだりしているように思えました。言葉がわからなくても、またその時体調が悪かったり疲労を感じていても、子どもたちに和まされ、パワーを分け与えてもらったような気がします。

また、日本にはないような経験もしました。いきなり停電になってしまったり、蛇口をひねても水が出てこなかったりしました。これほど節水をみんなで心がけたのは、日本の日常生活ではまずないと思います。異文化を体感したようでした。

カティラでもブーバイルでも、スタッフの方々が私たちのことを親身に守って下さり、おかげで安心して二週間を過ごすことができました。今回の経験を一度限りでは終わらせたくないという思いでいっぱいです。今回出会った多くの人々に、またいつか会えることを楽しみにしています。

私にとっての普通

共愛学園高校3年 高橋梨紗

「私とっての普通は、決して当たり前ではない。」

これが、私がバングラデシュで一番強く感じたことです。コンクリートの固まりの中で普段生活している私たちが決して感じることでできない自然に、肌で触れた2週間だったように思います。裸足で土の上を歩き涼しいと感じ、子どもたちからもらった花を見て、キレイだと思いき笑顔になりました。私はバングラデシュの子どもたちを見て、素直に羨ましいと思いました。日本はなぜ他人を疑うことが当たり前になってしまったのだろうか、どうして文化を誇りに思わないのだろうか。この二週間私は常に、日本とバングラデシュを比べてさまざまなことを見てきました。<彼らと同じ目線にたまたなければ、バングラデシュの二週間がムダになってしまおう。>本当にその通りだと思いました。バングラデシュの方々は神様の前では、平等だなと身をもって体験することができました。私たちが忘れてしまった自然の中で生活すること、親を大切に思う気持ち、国を愛するということ。人間にとって本当に大切なものはなんだろうと、沢山の子どもたちと触れるたびに考えていました。BDP スタッフやバングラデシュで出会った人たちを通して、聖書に書かれている愛を感じることもできたように思います。

また、私はこの旅で何人の人と握手をしたかわかりません。<触れる>ということは、言葉が通じなくても、気持ちたちが伝わる行為のように感じました。ジャマールプールで出会った子どもたちは本当に<触れる>という行為を大切にしています。私とできる会話はとても少ないものだったのに、ずっと手を繋いで隣にイミングが同じなことに少しだけ驚きました。わたしの名前を笑いながら呼ぶ子どもたちを見て、本当に可愛いという気持ちでいっぱいになりました。

私は日本に帰ってきてから、よくバングラデシュのことを思い出します。食事の時・お風呂の時・携帯電話でメールをしている時……今、バングラデシュの子どもたちは何をしているのだろうか……これは普通ではないんだなあ……と。この気持ちをずっと忘れずにいたいと思います。

自分の糧となる体験

共愛学園高校1年 樋口絢香

私は、この2週間でたくさんの経験をしました。初めは、バングラデシュの場所も良く分かってなくていたのに、帰ってくる時には50%くらいのベンガル人になっていました。経験でいうと、初めてカレーを食べた時に、3本指で食べていました。上手に5本指で食べるのも大変ですね。。。でも、2週間のうちで上達しました。ネットコナで、すてきな星空を見ました。外に出て上を見上げると星がちらばっていました。私は、イスを占領して寝ながら見っていました。寺子屋で、真剣に勉強している子どもたちに出会いました。「私、いままであんなに真剣に授業を受けたことあったっけ？」と帰りのバスで考え込んでいました。そして空港で、物乞いの子どもにも出会いました。本を読んだり、テレビで見たりしているのとは違い、目の前で自分に向かって話しかけてくるのです。たくさんのことを感じました。少し怖いとも思っていました。

初めに私は50%のベンガル人で帰ってきたと書きましたが、それはなぜ？か書きたいと思います。いわゆる、反省になります。

「色々な出来事に対して日本人としての目線で見ってしまった。」事です。なんでも日本と比べてしまいました。旅立つ前に“自然体で感じて吸収してこよう。”と目標を立てていたのに失敗しました。

この経験は、これからの人生にも大きな影響を及ぼすと思います。もっと、バングラデシュについて知りたいし、コミュニケーションの大きさも分かりました。私は、この経験をたくさんの人に伝えて生きたいです。最後になりますが、BDPスタッフのみなさん、その他支えてくださったみなさん本当にありがとうございます。

本当の幸せって何だろう？

共愛学園高校2年 上原あゆみ

今まで私は、何に対しても感謝するということを忘れていた気がする。水も電気も使えばなし、食事も三食十分に食べられるし、次から次へと物を買ったりする。しかしバンクラデシュに行っ、水がなければ外の井戸に行って水をくみ、停電になればロウソクをつけ、暗い中のミーティングといった不便だけれども、お互い協力して生活できる楽しさを知った。そして、私は十分便利な生活をしているのに次々に新しい物が欲しくなり、欲が出て、今与えられているものに対する感謝の心を忘れていたことに気づいた。学校訪問では、行く所行く所でたくさんのお花をもらい、一緒に歌をうたって、先生や子どもたちの笑顔をたくさん見ることができた。カティラでやった劇では、子どもたちの嬉しそうな顔がとても印象に残っている。それでも授業中は本当に一生懸命で、目をキラキラ輝かせて先生の言う事聞き、寝ている子もいないければ、つまらなそうな顔をしている子もいなかった。学校に通えることが嬉しい、楽しいということが見えていて本当によく伝わってきた。たくさんさんの学校を訪問するうちに、自分の学校生活のことをよく思い返していた。その度に授業を大切にしていけない自分の姿がよく思い出され恥かしくなった。

このスタディーツアーで、私のバンクラデシュという国のイメージが大きく変わった。わずか二週間の体験で、これほど自然と涙が出て、止まらなかつたのは初めてのことで、正直言って自分でも驚いた。言葉の壁というものはあるけれど、身振り手振りで伝えようと思えば伝わると思った。そして彼らの大好きな歌や踊りを見ていると、本当に心が温かくなり、幸せな気持ちになる。

物が沢山あるだけが幸せではない。物が無いから貧しいのではない。幸せは一人一人感じ方が違うけれど、決して物質だけではない。心で感じるものだと思う。しかし私は、本当の幸せが何なのかはっきりとした答えが出せていない。この二週間という私にとっ、とても貴重だった時間を大切にしながら、バンクラデシュでの経験を多くの人に伝えたいと思う。BDPのスタッフの方々には、常に私たちのことを守ってくださり本当に感謝している。最後に、この二週間共に泣き、共に笑いあえたメンバーに出会えたことがとても嬉しい。

ドンノバッド

共愛学園高校2年 千木良 芽衣

長いようですごく短かったバンングラデシュでの二週間を終え日本に帰ってきて、いつもの忙しくただ時間が流れていく生活が始まりました。私は、気づくとバンングラデシュでの日々を思い出して写真を眺め、子どもたちやスタッフのこと、ネットコロナのことを考えています。ついこないだの出来事なのに、もう何年も前のことに思えます。

私は、ダッカの空港に着いた時に思った事は、本当に来たという感動とすごい場所に来たのだという不安でした。バスに乗ったとき、窓をドンドン叩いてくる人、道を歩いていると手を差し出してくる人、私の服の裾をひっぱってくる小さい女の子。すぐにこの国の現状を知りました。

しかし、物質的には豊かとは言えないバングラの地で私が得たものは本当に大きなものでした。毎日の小学校訪問や現地の子どもたちとの交流でたくさんの笑顔に出会いました。決してきれいではない校舎、暗くて暑い教室でしたが先生の話をみんな真剣に聞き、みんなで授業をつくっていました。どこの学校でも私たちが座る場所がないくらいにいっぱい椅子なのに、子どもたちはつめて「ここに座って」と言うように手招きして椅子をあげてくれました。たくさんの持ちきれないぐらいのお花ももらいました。私は、もちろんベンガル語は話せませんが、たくさんの子どもと心を通わすことができたと思います。言葉が全くわからなくても一生懸命に分数(?)や掛け算を教えてくれた男の子や、私のノートにチェックをしてくれた先生の顔は忘れることはないと思います。

私は、スタディーツアーで学んだこと、感じたこと、考えたことをたくさんの人に伝えたいです。本当に楽しかった2週間でした。ありがとうございました。

ドンノバッド

たくさんのありがとを込めて

共愛学園高校1年 唐澤もえみ

バングラデシュで過ごした二週間で私に与えたものは、この上なく偉大なものだった。

この16歳という年齢で、バングラデシュで夏の二週間で過ごしたという事実は、これから先の私の人生においてかなり重要な位置を占める事柄になっていくと思う。

バングラデシュから帰国して早くも一週間が経過しつつある。今の私は、日本での平淡な生活に対し、少しの喪失感と切なさを感じている。いかにバングラデシュでの日々が刺激的かつ有意義なものであったかが今更身に染みる。なぜこのような気持ちになるかのだろうか。それはおそらく、本当の意味での人間の暖かさや、輝きというものに満ちた場所に、この二週間中ずっといたからだろう。

さて、ジャマルプールでBチームの皆さんやBDPのスタッフさん方と過ごした一週間は特にかげがえのないものだった。生命を奪われて間もないゴルやムルギルを見て、食事は生命を引き継ぐ行為であることを真摯に感じた。あの日ボートから見た夕陽は、水面に映え、紅く眩しく輝いていた。ジャマルプールの空を優雅に泳いだ鯉のぼりは自由を感じさせた。話には聞いていたものの、男性同士で手を繋いだり抱き合ったりしている現場を見てカルチャーションを受けた。幼い少女に「あなたの仕事はなんですか?」と聞かれ「学生です」と答えた時、少女の浮かべた『あなたは学生をしているだけで働いていないの?』と言わんばかりの怪訝そうな表情。フェリーの事件の時、BDPのスタッフさん方の迅速で誠実な対応に感動したこと。スタッフさんの歌と踊りを楽しみながらリクライニングチェア(?)のようなものに寝そべって談笑したひととき。キラキラ輝いていた子どもたちの瞳の中に、『学ぶこと』の真意を見た気がした。どの想い出もひとつひとつが輝いていて、思い出すと際限がない。

また、自分に『伝えたい』という強い意志があり、相手にも『理解したい』という心が備わっていれば、たとえ言葉が伴っていないでもコミュニケーションは可能という事に気付くことができた事はこのツアーの中でも大きな収穫のひとつであった。つまり、言葉がなくても心があればコミュニケーションは可能であるということだ。

確かに言葉はコミュニケーションをとる為には最も有効なツールではあるが、それ以外のツールでもコミュニケーションをとることは可能である。たとえば、それは笑顔であったり、歌であったり、踊りであったり。食事であったり、知識であったりもするかもしれない。五感全てを用いてコミュニケーションをとることがいかに素晴らしいものであるか体感した。

これらをはじめとした、数え切れないほどの素晴らしいものを与えてくれたバングラデシュには、感謝してもきれない。また、BDPのスタッフさんをはじめとした現地の方々や、今回のスタディーツアーに参加された皆さんに心からの感謝を捧げたい。同時に、ツアー中に多大なご迷惑をおかけしてしまっただけを心からお詫びしたい。

バングラデシュが与えてくれた、物質的なものと精神的なもの。

私は、その全てを、ずーっとずっと大切にしていきたいです。

ドンノバドナー!

第31回(2006年夏期)ACEF寺子屋訪問ツアー一参加者名簿

Aチーム(ネトロコナ地区)

A1	田坂 興亜	タサカ コウア	ACEF理事	牛込払方町教会
A2	丹羽 輝子	ニウ テルコ	キリスト教保育連盟	西那須野教会
A3	増田 憲子	マサダ ケイコ	横須賀学院小学校教諭	横須賀上町教会
A4	馬場 智子	バハ トモコ	東京女子大社会4年	
A5	樋口 木菜子	ヒグチ キナコ	東京女子大社会1年	
A6	高良 亜土	タカラ アツ	青山女子短大教養2年	日下部教会
A7	千木良 芽衣	チキラ メイ	共愛学園高校2年	
A8	樋口 絢香	ヒグチ アヤカ	共愛学園高校1年	

Bチーム(ジャマルプーニル地区)

B1	中川 英明	ナカガワ ヒデアキ	ACEF事務局長	ICU教会
B2	高崎 和子	タカサキ カズコ	ACEF評議員	所沢みくに教会
B3	山口 旬	ヤマグチ ジュン	横須賀学院小学校教諭	霊南坂教会
B4	河田 祐惟子	カワタ ユイコ	東京女子大心理3年	
B5	福井 千紘	フカイ チヒロ	青山女子短大英文2年	
B6	落合 真奈実	オチアイ マナミ	立教大法学部1年	
B7	高橋 梨紗	タカハシ リサ	共愛学園高校3年	高崎教会
B8	唐澤 もえみ	カラサワ モエミ	共愛学園高校1年	

Cチーム(カティイラ地区)

C1	井上 優子	イノウエ ヒロコ	ACEF事務局	浦和東教会
C2	塚本 潤一	ツカモト ジュンイチ	高崎教会牧師	高崎教会
C3	松本 拓	マツモト ヒロム	共愛学園中学高等学校教諭	
C4	高橋 麻由子	タカハシ マユコ	東京女子大地域2年	
C5	千葉 なつみ	チバ ナツミ	青山女子短大教養2年	
C6	石澤 萌依子	イシザワ モイコ	青山女子短大家政1年	青山教会
C7	上原 あゆみ	ウエハラ アユミ	共愛学園高校2年	高崎教会



バンガラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

個人会員	年額1口	5,000円
団体会員	年額1口	50,000円
学生会員	年額1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由
郵便振替	00100-0-185540	

アジアキリスト教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL & FAX: 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

<http://www.acef.or.jp>